

＜翻 訳＞

モンボド卿の『言語の起源と進歩について』

その源泉, 創まり, 背景

特に弁護士図書館に注目して (4)

I. M. ハメット

伊藤忠夫 訳

第 XI 章 『言語の起源と進歩について』に対するド・ビュフォンの『自然史』の影響

1. モンボド文書 76: 「ビュフォンの人類の変種の説明からのノート」

ジャン＝ルイ・ルクレルク, コント・ド・ビュフォン Jean-Louis Leclerc, Comte de Buffon (1707–1788) とルイ＝ジャン＝マリ・ドーバントン Louis-Jean-Marie Daubenton (1716–1800) は, 1749 年, 有名な『自然史 [=博物誌]』の初めの三巻を出版した。そして, スコットランド啓蒙運動が最高潮に達し, モンボドが『言語の起源と進歩について』に着手していた 1760 年代の半ばまでには, その大部分は, 既に現れていた。この著作はスコットランドでは特に好評を博していたが, そこでは, 1755 年に, 「エディンバラ評論の執筆者たちへの手紙」の中で, アダム・スミスが, 「王の陳列室」の記述においてビュフォンとドーバントンが採用したデカルト的諸原則を, 英国の科学の著作における秩序だった配列の欠如と対比したのだった。⁽¹⁾

初めの 3 巻の第 2 版 (1750) と, 多分第 IV 巻が, 1754 年 3 月, 弁護士図書館のために購入されたが, それは, 保管者デイヴィッド・ヒュームによってなされ, 二人の管理者によって承認された。その管理者の一人は, ジェイムズ・バーネット (後のモンボド卿) であった。⁽²⁾

(1) 『アダム・スミスの初期の著作』, リンドグレン編, 1967 年, 15–23 頁。

(2) スコットランド国立図書館の草稿 FR 118: 「1725 年に始まる職務関連の本図

ビュフォンを扱っているモンボド文書の中に現存する三つの草稿のうちで、最も早いものは、モンボド文書76:「ビュフォンの人類の変種の説明からのノート」“Notes from Buffon’s account of the varieties of the Human Species”であるように思われる。これは、大体において、『自然史』第Ⅲ巻のビュフォンの同じ題の章(371頁以下)に基づいている。しかし、モンボドは、少なくとも、第Ⅳ巻冒頭の「動物の本性に関する論述」“Dissertation on the nature of animals”も読んでいたようである。

モンボド文書143:「ガリビ語とカリブ語に関する所見」“Observations on the Galibi and Caribee Languages”(1764年の日付がある)の場合と同様、モンボドの文書76における論評は、言語の起源と進歩に関する彼の見解の説明に発展している。モンボドの付けた題における「ノート」“notes”という表現は、しかし、誤解を招くおそれがある。草稿は、最初の原稿にしてはどうも一貫性をもって構成され過ぎているようであり、手書きの文字(モンボドのものである)は、著しく整っている。それに、特にモンボドが自分の考えを展開している文書の後半では、注意深く手を入れたことを示す、長く、整然とした余白への書き込みがある。実際、もう一つの論文、モンボド文書75があり、恐らく文書76のほんの少し前に書かれているものだが、関連する主題を扱い、その題目が示すように、明らかにビュフォンに刺激されたものであった。その題目は「動物の類と種への区分について — 種の保存における自然の配慮について — 究極原因について」“Of the Distinction of Animals into Genus and Species — Of the Care of Nature in the preservation of Species — Of Final Causes”である。これは、しかし、失われた。

モンボド文書76における、剝製の「オラン＝ウータン」(実は、チンパンジー)を見るためにパリの王の陳列室をモンボドが訪れたことへの言及とド・ブロスの『言語機構形成論』(出版, 1765)への明白な何回かの言及によって、この草稿の日付は、早くてもおよそ1765-66年になる。モンボド文書14(「抽象観念の問題の続き」“Continuation of the Subject of

書館の管理者と保管者の処置記録簿”“Register of the Proceedings of the Curators and Keeper of the Library in relation to their Office Beginning Anno 1725”を見よ。

Abstract Ideas”）は、これもビュフォンの『自然史』を扱い、モンボド文書 76 の終わり近くで表明されている見解を展開しているものだが、1767 年 1 月 4 日の日付があるので、そのことで一層確実に、モンボド文書 76 を、モンボドのパリへの三回目最後の訪問からの帰国に続く生産的な時期に割り振ることが出来るだろう。それだけではなく、この文書では、『自然史』の第 XIV 卷（1766）からの類人猿についての関連する材料が取り上げられていないのだが、この巻をモンボドは、ビュフォンに関する三つ目の論文「オラン＝ウータンとそれが人類であるかどうかについて」（モンボド文書 109）のために利用したのであるから、モンボド文書 76 を書く前には、モンボドは、ビュフォンの最新の第 XIV 巻を読む機会を未だ得ていなかったことになるだろう。（ヒュームが保管者を辞してから、明らかに収書の詳細な記録が取られていないので、残りの巻がいつ弁護士図書館に購入されたか、不明である。）⁽³⁾

モンボド文書 76 は、『自然史』第Ⅲ巻の同じ題の章から得た多くの着想、事実、文献関係の参照事項を含んでいる。そして、そのうちの幾つかは、『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻における野蛮人と野生の子供のモンボド自身の説明の基礎を成したのである。この草稿の重要性を高めているのは、スコットランド国立図書館所蔵の『自然史』の第Ⅲ巻（第 2 版、1750）の余白に、今は色褪せているが、控えめなインキの書き込みが見られることである。この巻は、以前は弁護士図書館のものだが、明らかに 1754 年にデイヴィッド・ヒュームによって購入されたものであった。そして、殆どあらゆる場合に、その書き込みは、モンボド文書 76 において、ビュフォン第Ⅲ巻の頁番号と共に、モンボドが引用している何らかの人種的特徴を記述する文章の傍らに付けられているのである。例えば、一本の奇怪な脚を持ったインドの民族⁽⁴⁾やフィリピン、台湾、ニコバル諸島の尾を持った人間の記述である。⁽⁵⁾

それらの一つ、尾を持った人間の記述は、『言語の起源と進歩について』

(3) モンボド文書 8 と 71 も、幾分ビュフォンに負うところがあるように思われる。

(4) ビュフォン第Ⅲ巻、414 頁；モンボド文書 76、6 頁。

(5) ビュフォン第Ⅲ巻、401-2、396 頁；モンボド文書 76、2 頁。

第I巻⁽⁶⁾に取り入れられたが、モンボドは、リンネの『学士院の楽しみ』*Amoenitates academicae* 第VI巻におけるキーピング船長という人物の報告を確かめてからそうしたのである。彼は、意見を求めてリンネに手紙を書き送り、キーピングの本（ストックホルムで出版、1743）を一冊手に入れることもし、その関連部分を翻訳させた。⁽⁷⁾ 皮肉なことに、この重要な旅行家の物語は、書評家たちがモンボドの軽信的態度を典型的に示すものと考えたのだが、その信憑性を厳重に確認してから初めて『言語の起源と進歩について』第I巻に取り入れられたものだったのだ。

こうした源泉の慎重な確認は、『言語の起源と進歩について』第I巻におけるモンボドの野蛮人の説明全体について明らかに見て取れる。ド・レペ de l'Epée, ブレイドウッド Braidwood, ジョセフ・バンクス卿, イエズス会士ルーボー神父のような知人によって彼に与えられた個人的な報告やヘロドトスとディオドロス・シクルスのような数人の古典作家の著作を別にすれば、『言語の起源と進歩について』第I巻のその主要部分のためのモンボドの源泉の殆どすべては、ビュフォンの人間の変種に関する章の中に見出すことが出来る。しかし、与えられている参照頁番号、使用された版、ビュフォンが言及していない材料の取り込みから明らかなように、可能ならば常に、モンボドは、言及する本 — 大部分は旅行記 — を自分で読んだのである。つまり、彼の学問は、綿密なのである。ビュフォンから知った事実は、印刷された資料、個人的報告、古代人の報告に照らして確認された。古代人の場合は、時間的に人間の初期の歴史により近いし、彼の考えでは、それ以後に失われた記録を入手する機会があったというのである。

しかし、人種的特異性の説明より重要なのは、同じ章における、野蛮状態、特に北米インディアンについてのビュフォンの議論である。⁽⁸⁾ スコットランド国立図書館所蔵のビュフォンの『自然史』第III巻では、その部分の最初のところに、既に指摘した文章におけるのと同じやり方の書き込み

(6) 234-6頁。本章の『言語の起源と進歩について』第I巻への参照は、すべて「初版」へのものであることに注意。

(7) 『言語の起源と進歩について』第I巻とモンボド文書の中のリンネへの手紙の写しを参照せよ。

(8) ビュフォン第III巻, 490-93頁。

がある。

そこでビュフォンは、人間の科学研究に対する野蛮人と野生の子供の意義を論ずるだけでなく、モンボドのためにジョセフ・バンクス卿(後の王立協会会長)が面接した、ハノーヴァーの森で発見された野生の少年と、1764年か1765年にモンボドが会ったムミ・ル・ブラン Memmie le Blanc であることが明らかな、フランスの森で見付けられた野生の少女にも言及している。その会見は、ラ・コンダミンによって設定された可能性が高い。彼は、ムミの作者不明の報告を『野生の少女の物語』*Histoire d'une Fille Sauvage* という形で編集しており、この本をモンボドは、書記のロバートソンに翻訳させ、1767年にエディンバラで彼自身による匿名の序文を付けて出版したのだった。⁽⁹⁾

それに加えて、ビュフォンの野蛮人のそこでの議論に対する文献的参照事項は、ラ・オンタン(1702)、シャルルヴォワ Charlevoix (1744)、『教養的文学』*Lettres édifiantes* というモンボドだけでなくド・ブロスも利用した良く知られた著作ばかりでなく(ついでながら、ラ・オンタンの著作も1754年に弁護士図書館に収書されていた)、別のイエズス会士による旅行記も含んでいる。その本というのは、希観書で、モンボドも僅か二冊の所在を知るだけだったが、一冊は大英博物館に、もう一冊はパリの王立図書館にある、ガブリエル・サガール・テオデ Gabriel Sagard Theodet 『ヒューロン国旅行記』*Le voyage du pays des Hurons* (パリ 1632) である。これは、モンボドが1764年の秋か1765年に、王立図書館、現在の国立図書館 Bibliothèque National から借り出した著作であり、また彼のジェイムズ・ハリスへの手紙と『言語の起源と進歩について』の脚注によると、野蛮なアメリカの言語の辞典と文法と共に、彼に言語の起源と進歩の歴史を企てるように促した著作である。⁽¹⁰⁾

(9) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 180頁。

(10) ビュフォン第Ⅲ巻, 493-94頁; 『言語の起源と進歩について』第I巻, 316頁; 1766年3月26日付けのハリスへの手紙(ナイト Knight, 49頁)。ビュフォンは、サガール・テオデの本を、第Ⅷ巻(1760年) [298頁] でもビーヴァーの説明の中で挙げている。そこからモンボドも着想を得ているが、しかし、モンボドが1764年と1765年のパリ訪問以前にこの巻を読んでいたと想定する必要はない。

モンボドがその時までに人類の変種を扱った『自然史』第Ⅲ巻のその章を読んでいたことは、勿論、確実ではない。しかし、彼がその章やもっと多くの章を詳しく知っていたという強力な証拠がある。「野生の少女」、サガール・テオデ、そして、北米土着の人々の起源と言語⁽¹¹⁾—この最後の問題は、モンボドが既に「装丁草稿」で論じていた主題だったが⁽¹²⁾—へのビュフォンの言及が、この仮説を支持する唯一の証拠なのではない。第Ⅲ巻において、ビュフォンはまた、聾啞者を話すように訓練することの意義、カリブ語の例外的な原始性⁽¹³⁾、ラ・コンダミンのアマゾン地域の部族の言語の報告⁽¹⁴⁾をも扱っている。そして、第Ⅳ巻(1753)では、類人猿と人間との関係さえ扱っている。その文章⁽¹⁵⁾は、弁護士図書館の本では、第Ⅲ巻における文章と同じやり方で書き込みがなされている。1764年(そして、恐らく1765年)のパリ滞在中に、モンボドも聾啞教育者二人(一人がド・レペ神父だった)を訪問し、カリブ語の辞典を調べて、その言語について重要な論文を書き、ラ・コンダミンと野蛮な言語について論議し、そして、王の陳列室の剥製の「オラン＝ウータン」を見に行ったが、それは、単なる偶然の一致であろうか。聾啞、野生の子供、オラン＝ウータン、そして、野蛮な人々とその言語は、確かに、1760年代には、盛んに論じられていた。そして、前章で指摘したように、モンボドは、ルソーの『論文』でカリブ語について読んでいたし⁽¹⁶⁾、また、同じ『論文』の脚注で、オラン＝ウータンについてある程度のことは読んでいた。但し、それは、別のところであったかも知れない。例えば、シャルル・ボネ Charles Bonnet の『自然の観照』*Contemplation de la Nature* (主として1747-52年に書かれた)は、実際には、問題の年1764年に出版された。この著作では、モンボドによって観察され、ビュフォンの『自然史』で詳細に記述されているのと同じ剥製の「オラン＝ウータン」が、モンボド自身と著しく

(11) ビュフォン第Ⅲ巻, 490-93, 510-16頁。

(12) 装丁草稿4, 245頁。

(13) 495頁以下。

(14) 504-5頁。

(15) 97頁。

(16) モンボド文書71, 11頁。

類似した見地で論じられていた。⁽¹⁷⁾ 以上のようなことはあるのだが、それでも『言語の起源と進歩について』の展開にとって決定的に重要な非常に多くの要素が、モンボド文書 76 の基礎であるビュフォンのただ一つの章に見出されるのは、驚くべきことである。

もしモンボドが、1764 年の二回目のパリ訪問の前にこの章を読んだとすれば、そのことは、『言語の起源と進歩について』第 I 巻の創まりと結び付いている大部分の決定的な出来事の間の一環の関係をわれわれに示してくれる。そして、もしモンボドが、1764 年の秋までには、『自然史』第Ⅲ巻についてそれ程まで多くのことを詳しく知っていたのだと断定するならば、同様に、彼が第Ⅲ巻の最初の部分を読んでおり—その部分には国立図書館所蔵本では同じような書き込みがあるが—、そこで、王の陳列室訪問を予定に入れたのだと推定しても良いだろう。しかし、そこまで想像をめぐらせることは、不必要である。というのは、モンボドはまず間違いなく、幾つかの源泉からオラン＝ウータンに対する関心を育て上げて来ていたからであるし、また、『自然史』は全体として、王の陳列室の収集品に基づいていたのであるから、それが彼がそこを訪れた理由の説明になるだろう。

しかし、どういう作家にせよ、その作品の創まりにおける諸段階を再構成しようとする試みは、常に、推定に流れて危ういものである。したがって、その試みに不利な場合を明確に述べる必要がある。1764-65 年の出来事が、モンボドがその時までにはビュフォンのを読んでいたと仮定しなくても、再構し得ることには、疑いはない。そして、それが特に価値あることであるのは、『言語の起源と進歩について』の創まりにおけるシャルル・マリ・ド・ラ・コンダミン（1701-73）の非常に重要な役割を重視することになるからであり、その事実、モンボドがビュフォンを読んだ日付についての問題とは全く別個のことだからである。

ラ・コンダミンは、フランス王によって南アメリカへの科学探検旅行に派遣され、何回も増刷された旅行報告⁽¹⁸⁾を出版した有名な旅行家であっ

(17) ロリン・アンダーソン Lorin Anderson, 『観念の歴史誌』XXXVII 巻, 1 号, 45-58 頁を参照せよ。

(18) ブゲール Bouguer とラ・コンダミン 『土地の様相...』 *la Figure de la terre . . .*, Paris, 1749 年。[1776 年弁護士図書館目録]

た。だから、ラ・コンダミンはとても啓蒙運動の重要人物とは言えないが、モンボドが彼の名前に初めて出会ったのは、ラ・コンダミンの『南アメリカ内陸への旅行要約報告』(1745)からのアマゾン低地の原始的言語に関する所見へのビューフォンの出典指示であったと想定する必要はない。但し、モンボドが利用したのは、この著作と野生の少女の報告だけである。⁽¹⁹⁾

どのようにして、モンボドがラ・コンダミンの名前を知るようになったにせよ、また、どのようにして、彼が恐らく野生の少女と原始的なアメリカの言語の直接的な知識のために彼を訪れたにせよ、ラ・コンダミンが『言語の起源と進歩について』の創まりにおいて極めて重要な役割を演じたことに、疑いはない。彼は、モンボドに、彼が編集し、その信憑性を保証した野生の少女の物語の翻訳を出版する許可を与えた。彼が野生の少女との面接の手筈を整えたことは、まず間違いない。彼はまた、モンボドに、野蛮なアメリカの言語の少なくとも一つの辞典と文法を貸した。モンボドは、1639年にマドリードでイエズス会士によって出版されたパラグアイの言語の一つ、ガラニ語 Garani のその説明の彼にとっての重要性については、余り多くを語っていない。それは多分、「ヨーロッパで現在話されているどの言語とも同じほど規則的に形成された言語」のその本の記述は、その言語がより文明化した人々から学ばれたものであることを示唆するからであろう。⁽²⁰⁾ しかし、その言語についてラ・コンダミンと議論したこと、ラ・コンダミンがその言語の第一人称複数の包括形と除外形の区別を、ブラジルで話されているある言語と比較したことを、モンボドははっきり認めている。

われわれは、彼らの野蛮な言語の議論はそれだけに留まらなかっただろうし、ラ・コンダミンのより讃めそやのような野蛮な言語の見方によって、モンボドはパリで利用できる他の文法と辞典を調べることになった

(19) 更に、ブラジル、ギアナ、アマゾン河への旅行のこの報告は、これにはモンボドは早くも1764年に、ガリビ語とカリブ語に関する論文で言及しているが、その年に、『科学アカデミー紀要』*Mémoires de l'Académie des Sciences* に発表された。これは、モンボドが確実に弁護士図書館で大いに読んだ刊行物であり、1710-1740年と1748年の巻が購入され、以後逐次追加された。

(20) 『言語の起源と進歩について』第I巻、381頁。

と、推測しても良いだろう。その辞典とは、1763年(一年だけ早いかも知れない)にパリで出たガリビ語の辞典と1665年にオセールで出たカリブ語の辞典である。後者は、別のイエズス会宣教師レイモン・ブルトン Raymond Breton の著作であった。前者は、シモン＝フィリベール・ド・ラ・サール・ド・レタン Simon-Philibert de La Salle de l'Etang (1700頃-1765)によって匿名で編纂されたもので、その南米の植民地を訪れた様々なフランス人からの情報を基にしていた。⁽²¹⁾ 1764年の日付のあるモンボドのガリビ語とカリブ語に関する論文は、『言語の起源と進歩について』第I巻における野蛮な言語の議論のほぼ半分の基礎となっているが、⁽²²⁾ モンボドの言葉をそのまま受け取るなら、サガール・テオデをモンボドが読んだのよりも更に前のことになるだろう。というのは、彼は、1766年にハリスへの手紙で、「この前パリに」いた時(つまり1765年)に、その著作を借り出したと書いていたからである。より公算が大きいのは、彼が『ヒューロン国旅行記』を読んだのと同じ頃だということである。もしそうであるならば、ブルトン神父のカリブ語の記述は、モンボドが後にハリスに王立図書館で見付けたと言ったアメリカで話されている野蛮な言語の報告のうちの一つであるに違いない。どちらにせよ、モンボドのラ・コンダミンとの野蛮な言語の議論が、『言語の起源と進歩について』が生まれてくることになる研究につながって行ったように見えるのである。

われわれは、ビュフォンの原始的なカリブ人たちへの頻繁な言及とその人々の言語を研究しようというモンボドの決心との間に、単純な因果関係を想定することは出来ない。しかし、それらの人々の原始性についてのペール・デュ・テルトル Père du Tertre の説明からのルソーの引用文によって、彼は既に、その人々が人間性の初期の段階を例証していると確信していたし、⁽²³⁾ ブルトンの本がルーボー(または、モンボドのイエズス会士の友人の別の人)に知られていたとも考えられる。何れにしても、野蛮な言語の17世紀と初期18世紀の報告の大部分は、イエズス会宣教師に

(21) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 337-8頁。

(22) 特に364頁以下を見よ。

(23) モンボド文書71, 11頁。

よって書かれたものであり、モンボドの王立図書館の友人、M. カプロニエは、ブルトンとサガール・テオデ両人の著作をモンボドに勧めたとすることが出来るだろう。というのは、彼は、モンボドにサガールの著作を数週間借り出す許可を与えているからである。⁽²⁴⁾

しかし、以上のような可能性に選択の余地はあるものの、モンボドが、彼の関心を引き付けるようになったばかりの主題、本、人々、即ち、最も重要なものを挙げるだけでも、アメリカ・インディアン諸言語、ラ・コンダミン、「野生の少女」、サガール・テオデ、に言及しているビュフォンの第Ⅲ巻のある章を読んだのは、1764年か1765年のパリ滞在から帰国して直ぐのことだったと想定するのは、実際余りにも偶然の一致が大き過ぎると思われる。

『言語の起源と進歩について』の「創まり」に対するビュフォンの影響、というのは、内容面でのその影響は、モンボド文書76, 14, 109がビュフォン第Ⅲ巻及び『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻と比較されれば明瞭になるからだが、それを支持するものとして、次のことに注意しても良いだろう。即ち、スコットランドにおけるビュフォンの名声、自然的歴史に対するスコットランド人の関心、自然的歴史の研究と「存在の等級」の観念との親縁性、1754年以来の弁護士図書館におけるビュフォンの『自然史』の初めの3ないし4巻の存在、ヒュームによるそれらの購入のモンボドの承認である。以上のことに、ビュフォンによって提起された種の問題、これは、『言語の起源と進歩について』そのものとスコットランド啓蒙運動にとって中心的論争点であるが、その問題を付け加えるならば、われわれは、モンボドが1764年よりずっと前にこの著作に親しんでいたのは、まず間違いないと推断しなければならない。セレクト協会の同志会員、アダム・スミスは、早くも1755年にその著作の記述の体系を賞賛した。そして、その哲学的意義は、エディンバラの形而上的気質を持った知識人たちによって頻繁に論議されていたに違いないのである。(コンディヤックは、その著作が何冊か弁護士図書館にもアダム・スミスの蔵書にも収められているが、彼の『動物論』*Traité des Animaux* [1755] においてビュフォンの見

②4 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻、316頁。

解に関して論評していた。) 種としての人間に関する章は、特に、人間の歴史に非常に関心も持ち、人類の人種と慣習の無限の多様性の道德に係わる意義を強く意識していた哲学者たちの間に、巨大な関心を引き起こしたことだろう。そのような状況にあっては、そして、特に最初期のモンボド文書からのモンボドの知的関心事について分かっていることを考慮するならば、モンボドが遅く 1764/65 年にパリから帰った時までビュフォンの主張に気付いていなかったと想定することは、不可能に思われるだろうし、彼自身が『自然史』第Ⅲ巻に手を付けていなかったと想定することは、到底出来ないことである。

こうして、1750 年代の終わるか 1760 年代の初めのある時期に、というのは、われわれが知っているように、この時には、彼は既に言語の歴史に表れている人間の歴史に心を奪われていたからだが、モンボドが、少なくとも、ビュフォンの『自然史』第Ⅲ巻の人類の変種に関する章を(そして恐らく人間の類人猿との関係を扱っている第Ⅳ巻の最初の部分も)読んだことを、殆ど確信して良いだろうし、また、そのことが 1764-65 年のフランスでの出来事に直接的に通じていったことを、殆ど確信して良いだろう。彼はまず間違いなく、既にルソーの『人間不平等起源論』を読むことで、「現代の旅行家によってなされた諸発見」の価値を確信するようになっていた。それらは、原始的人間の状態がまだ存在していることを示すことによって、人間の自然的歴史のわれわれの知識を増加させたのである。⁽²⁵⁾ ルソーの諸著作は、モンボドにとって重要な幾つかの他のものと同様に、ヒュームが保管者であったときに弁護士図書館に購入された。それは、1754 年 3 月(ビュフォンの『自然史』収書の丁度 3 週間前)であった。⁽²⁶⁾ スコットランドにおけるルソーの度外れの人気は、良く知られている。そして、一般的で思弁的な形で人間の歴史と言語の起源を扱い、オラン・ウータンに関する脚注を含んでいるルソーの『論文』は、モンボドが『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻とモンボド文書 71 で認めているように、決定的に重要な初期の着想の源であった。それはまた、『言語の起源と進歩

⁽²⁵⁾ モンボド文書 71, 9-10 頁。

⁽²⁶⁾ 「本図書館の管理者と保管者の処置記録簿」, スコットランド国立図書館 (FR 118) を見よ。

について』第Ⅰ巻のような推測的歴史の優れた模範でもあった。

しかし、モンボドが『自然史』を読んだことの帰結は、多分、もっと大きかった。もし、推定されるように、彼が1764-65年にパリを訪れる前に第Ⅲ巻を読んでいたら、特に大きいものとなる。何故なら、ド・ブロスの『言語機構形成論』に彼が会う前に、ビュフォンに親しんでいたことになるからである。『言語機構形成論』は『自然史』と同じ哲学的観点を示した著作であった。事実、二人の作家は、友人であった。ビュフォンは、ダランベールのように、草稿の『言語機構形成論』を1750年代半ばという早い時期に読んでおり、彼の研究は、ド・ブロスの研究を補足するものである。両者とも、モンボドに人間の歴史について、啓示を与える情報と着想を提供したが、一方は人類学的立場から、他方は言語学的立場からであった。しかし、同時に、両者とも、精神の本性と精神の物理的世界との関係についての彼の合理論的前提に反対するものであった。

ビュフォンの人類の変種に関する章が『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻に対して持つ意義は、その両者をモンボド文書76と詳細に比較するならば、見えてくるが、まず文献的参照事項との関係の比較、次に着想との関係の比較を行うことにする。

2. 参考文献

モンボド文書76の冒頭で、モンボドは、ビュフォンの野蛮な国民についての事実の収集を（「数え切れないほどの旅行記と歴史書からの」）彼の出会った最も詳しいものと賞賛している。モンボド文書の他の草稿を見ると、彼は、ビュフォン第Ⅲ巻に示されている書物以外にその種の多くの著作を調べているが、ビュフォン第Ⅲ巻とモンボド文書76に引用されている著作と『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻との間には、これから示す一覧が明らかにするように、著しい対応がある。だから、ビュフォンの『自然史』のこの章のモンボド自身の野蛮な人々と言語の説明への寄与は、到底評価し過ぎることは出来ない程である。

著作の大部分は、1776年弁護士図書館目録に挙げられている。一冊のみは、より早期の1742年目録に見出される。それらの著作が既に1760年代にこの図書館で利用出来たかどうかを知る方法はないが、1725年に始めら

れ、管理者とヒュームの関係がうまく行かなくなった1754年まで続いている「本図書館の管理者と保管者の処置記録簿」“Register of the proceedings of the Curators and Keeper of the Library”を見れば、著しい数のこの種類の本が大体1748年以後に収書されたことが分かる。1749年6月だけで、六冊のそのような著作が、ボズマン Bosman の東部ギニアの記述（ビュフォンがオラン・ウータンの説明に利用したもの）とダンピア Dampier の世界周航記（ビュフォンとモンボドが利用した）も含めて、購入された。1754年4月に、ヒュームのもとで、図書館は、他にも旅行記があるが、ラバ Labat のアフリカの報告とベルニエ Bernier とラ・オンタンの旅行記を収書した。すべてモンボドによって利用されたが、特に最後のものは、『言語の起源と進歩について』第I巻における北米の諸言語の説明の主要な源泉の一つであった。⁽²⁷⁾

〈ビュフォン第三巻、モンボド文書76と『言語の起源と進歩について』第I巻で言及された著作〉

シャルルヴォワ, ピエール・フランソワ・グザヴィエ・ド Charlevoix,
Pierre Francois Xavier de

『新フランスの歴史と一般的記述』*Histoire et description générale de Nouvelle France*, Paris 1744 [1776年弁護士図書館目録]

ダンピア, ウィリアム Dampier, William

『世界周航記. . .』*Voyage around the world . . .* 3巻, London 1703 [1776年弁護士図書館目録]

フレジエ, A-F. Frézier, A-F.

『南海. . . の航海報告』*Relation du voyage de la mer du Sud . . .* 2巻, Amsterdam 1717 [1742年弁護士図書館目録]

ラ・コンダミン, シャルル・マリ・ド la Condamine, Charles Marie de
『南アメリカ内陸への旅行要約報告』*Relation abregée d'un voyage fait dans l'interieur de l'Amérique Meridionale . . .* 1745 [1807年

²⁷⁾ 『言語の起源と進歩について』第I巻, 177, 324, 335-40, 357-77, 383-4頁。

弁護士図書館目録]

これは、『科学と文学の王立アカデミーの歴史』 *Histoire de l'Académie Royale des Sciences et Belles Lettres* . . . 1745にも収載 [1776年弁護士図書館目録]

ラ・ベガ, ガルシアス・ラッソ・デ la Vega, Garcias Lasso de

『インカ, ペルーの王たちの歴史』 *l'Histoire des Incas, rois du Pérou*, Paris 1744 [1776年弁護士図書館目録]

ル・ゴビアン, シャルル le Gobien, Charles

『マリアナ諸島の歴史』 *l'Histoire des Isles Marianes* . . . Paris 1700

これは、次のものに収載されている。

キャランダー, ジョン Callander, John

『知られた大陸オーストラリア』 *Terra Australis cognita* . . . 3巻, Edinburgh 1766 [1776年弁護士図書館目録]

ポーロ, マルコ Polo, Marco

『タタール人のことについて』 *Delle cose de Tartari* . . .

これは、ラムジオ Ramusio, G.『様々な航海記と旅行記』 *Navigazioni e viaggi diversi* 3巻, Venice 1554に収載 [1776年弁護士図書館目録]

以上のものに、ビュフォン第Ⅲ巻,『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻とモンボド文書の様々な草稿で言及されている著作を付け加えなければならない。

ラ・オンタン, ル・バロン・ド la Hontan, le Baron de

『北アメリカ新旅行記』 *Nouveaux voyages dans l'Amérique Septentrionale* . . . 2巻, The Hague 1702, 1704 [1776年弁護士図書館目録]

サガール・テオデ, ガブリエル Sagard Theodet, Gabriel

『ヒューロン国大旅行記』 *Grand Voyage du pays des Hurons* . . . Paris 1632 [1807年弁護士図書館目録。この目録は、サガール・テオデの「ヒューロン語辞典」 “Dictionnaire de la langue Huronne-

...”を別個に記載している]

この第二のグループには、イエズス会宣教師たちの報告から編纂された『アジア、アフリカ、アメリカに関する教養的で珍奇な文学』*Lettres édifiantes et curieuses concernant l'Asie, l'Afrique et l'Amérique* [1776年弁護士図書館目録]が入る。『言語の起源と進歩について』第I巻(467頁)では、モンボドは、ド・ブロスの『言語機構形成論』で言及されているのを知っていた第26巻(これには、ポンス Pons 神父のサンスクリット語の説明が含まれていた)だけを挙げているが、モンボド文書を見ると、彼が少なくともビュフォンによって用いられた諸巻のうちの一冊、第23巻を調べていたことが分かる。

もう一つ読んだ可能性のあるものに、ロシア・アカデミーによって編纂されたカムチャツカの歴史がある。モンボドは、ジェイムズ・グリーヴ James Grieve の翻訳、『カムチャツカの自然史 [博物誌]』*Natural History of Kamschatka* (Gloucester 1764) [1776年弁護士図書館目録]⁽²⁸⁾を用いた。そしてまた、「1764年年間記録」Annual Register for 1764の報告を読んだ。ビュフォン第Ⅲ巻は、頻繁にカムチャツカに言及しており、アメリカ・インディアンはカムチャツカ地域を経由して新大陸に到ったのだというビュフォンの説にモンボドが影響されていたことに、疑いはない。しかし、彼がその報告のフランス語訳を用いたかどうか、はっきりしない。

両人とも、頻繁にリンネに言及する。モンボドのビュフォン第Ⅲ巻に対する攻撃は、主として、『自然の体系』*Systema Naturae* 4巻 (Vindobonae 1767) [1776年弁護士図書館目録]と『学士院の楽しみ』*Amoenitates academicae* 6巻 (Lugduni Batavorum 1749)に基づいている。⁽²⁹⁾しかし、ビュフォン第Ⅲ巻は、殆ど専ら別の著作、『スウェーデンの動物相』*Fauna Suecica* (1746)に言及しているが、これをモンボドが利用しなかったのは、明らかである。

大体において、これらは、良く知られた著作であって、恐らく、1766年には、弁護士図書館で利用することが出来ただろう。一つの例外は、勿論、

⁽²⁸⁾ 『言語の起源と進歩について』第I巻, 288, 306頁参照。

⁽²⁹⁾ 『言語の起源と進歩について』第I巻, 236-37頁。1776年弁護士図書館目録参照。

サガール・テオデ (1632) で、これをモンボドは、フランス王立図書館で調べたのだった。この本は、1807年までは弁護士図書館目録に記載されていない。しかし、それは、1790年代の終わりに収書されたが、そのことは、モンボドの影響 (彼は、図書館に備えるべきと考える本の一覧を作成した) か、度々『ヒューロン国大旅行記』に言及している彼の第I巻の影響である、と推測しても良からう。⁽³⁰⁾

上記のもの以外に、ビュフォン第Ⅲ巻とモンボド文書76 (或は、より頻繁に、モンボド文書の他の草稿) には現れるが、『言語の起源と進歩について』第I巻では言及されていないものが、二、三ある。また、勿論、『言語の起源と進歩について』第I巻と、モンボド文書76以外の様々な草稿では言及されているが、ビュフォンの人類の変種の説明には挙げられていない同じ種類の著作が、数はごく少ないが、存在する。そして、最後に、既に指摘したように、モンボドがモンボド文書だけで挙げている沢山の旅行記があるが、それらの多くは野蛮な言語の記述を含んでいるものである。⁽³¹⁾

上の最初の部類のうちの重要な例は、J. B. デュ・テルトル du Tertre 『アンチル諸島の自然と道徳に関する歴史』 *l'Histoire naturelle et morale des isles Antilles* (3巻, Paris 1667-71. 1776年弁護士図書館目録参照) である。この著作は、ビュフォンの人間の種類に関する章の主要な源泉の一つであるが、カリブ人を扱っている。カリブ人は、既に見たように、その原始性がモンボドの興味を引き付けた人種である。ビュフォンは実際、その人々は思考する能力がないのだと主張した。⁽³²⁾

ビュフォンのデュ・テルトルへの言及の大多数は、野蛮性の長い議論のなかに現れている。第Ⅲ巻の弁護士図書館所蔵本のその最初の部分 (490頁) には、モンボドによると思われる書き込みがある。そして、モンボド文書101 — 「タルタル Tartar [ママ] 神父のアンチル諸島原住民の報告からのノート」 “Notes from le Pere Tartar's [sic] Account of the Natives

(30) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 322-7, 362-3, 364以下, 371以下頁。

(31) 言語的情報を含むものの総合的目録については、『マースデン文庫』 *Bibliotheca Marsdeniana* (London, 1796年) を見よ。

(32) ビュフォン第Ⅲ巻, 496頁以下。

of the Antilles Islands . . .” —は、完全にデュ・テルトルに充てられている。しかし、ある若い地主への手紙—モンボド文書 71 はその写しだと思われるが、それを書いた時点では、この著作は、人間本性の初期の段階の入手し得る最善の説明を与えていると彼は信じているが、ルソーが『論文』で与えている幾つかの引用文以外には、読んだことのないものだと、モンボドははっきり述べている。⁽³³⁾ モンボド文書 71 は、モンボドがビュフォン第Ⅱ巻を読む前に、ルソーを読んでいたこと、つまり、実際、ルソーの『論文』が野蛮な人々の報告に対する彼の意欲をそそり、『言語の起源と進歩について』に向かう基礎を置いたこと、を確証するのに役立つ。

しかし、モンボドは、『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻のためのカリブ人の説明を書くに当たっては、ビュフォンが挙げていない二つの別の著作を利用した。ラ・ボルド la Borde⁽³⁴⁾ とシャルル・セザール・ド・ロシュフォール Charles Caesar de Rochefort である。後者は、ジョン・デイヴィース John Davies による翻訳『カリブ諸島の歴史』*History of the Caribby Islands*⁽³⁵⁾ で読んだもので、モンボドの気に入りの著作の一つ、レイ Ray の『神の知恵』*Wisdom of God* に引用されていたのだった。⁽³⁶⁾

これと同じ部類には、見たところ、モンボドがビュフォンの用いたものとは別の源泉で追跡した旅行家の物語への言及がある。顕著な例としては、ビュフォンがダ・ガマ da Gama や他の著作家に見出していたホッテントット人の言語の記述がある。それらの旅行家は、ホッテントット人の言葉を溜め息や七面鳥の鳴き声に譬えていた。⁽³⁷⁾ モンボド文書 76 やモンボド文書の他の箇所では、モンボドは、そのことを、アマゾン地域のある部族の言葉についてのラ・コンダミンの似たような説明と共に引用しているが、⁽³⁸⁾ 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻には、後者のみを入れている。

⁽³³⁾ モンボド文書 71, 11 頁。

⁽³⁴⁾ 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 241, 258 頁。

⁽³⁵⁾ London, 1666 年。1787 年弁護士図書館目録と『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 338 頁参照。

⁽³⁶⁾ ポケット・ブック (モンボド文書) 41。レイ, 232 頁を見よ。

⁽³⁷⁾ ビュフォン第Ⅲ巻, 471-72 頁。

⁽³⁸⁾ モンボド文書 76, 5, 27 頁。

る。これは恐らく、彼が後になって、ホッテントット語に関するもっと明確な情報を、ビュフォンの源泉のうちの別のものを調べて、発見したからであろう。それは、ピーター・コルベン Peter Kolben の『今日の良き望みの泉；または特にホッテントットの諸族，その宗教，政治，法，習慣，儀式，意見の詳細な説明』 *Caput Bonae Spei Hodiernum; or A particular account of the several nations of the Hottentots, their religion, government, laws, customs, ceremonies, and opinions* (London 1731。1776年弁護士図書館目録参照) である。この著作は、ホッテントット人の言語の説明を含んでいる。⁽³⁹⁾ モンボド文書 109「オラン・ウータンとそれが人類であるかどうかについて」にこの本への言及が見られることは、この草稿がビュフォン第XIV巻 [1766] に基づいており、恐らくモンボド文書 76の直後に書かれたものであることからして、彼が後になって、多分ビュフォン第III巻を読んだ結果として、コルベンを調べたことを確証するものであろう。

ビュフォン第III巻も、エスキモー人とグリーンランド人を論じている。⁽⁴⁰⁾ これらの人々は、類似した言語を持つことを根拠として同じ人種に属すると考えるべきであると、彼は信じていた。⁽⁴¹⁾ 『言語の起源と進歩について』第I巻を出版するときまでには、モンボドは、ドップズ Dobbs のエスキモー語の語彙集を調べていた。そして、80年代の終わりから90年代の初めまでの間に、彼は、グリム・ソルケリンに、グリーンランド人の言語の問題について手紙を書いたのだった。⁽⁴²⁾

『言語の起源と進歩について』第I巻とモンボド文書から、モンボドは、ビュフォンが用いた著作を、他の源泉によって補充したことが分かる。特に目立つのは、ディオドロス・シクルス、ヘロドトス、ストラボン Strabo、ポリュビオス Polybius のような古代に書かれた旅行記と歴史である。(特に、モンボド文書 80「自然の珍奇なものと不思議な国々に関する

(39) モンボド文書 71, 13 頁, モンボド文書 109, 43 頁参照。

(40) 372-74 頁。

(41) モンボド文書 76, 1 頁。

(42) エディンバラ大学図書館, グリム・ソルケリン書簡 Grim Thorkelin Correspondence。

古代の著作家からの収集」“Collections from ancient authors concerning Natural Curiosities and Strange Countries”を見よ。)しかし、
 ビュフォンの『自然史』の初めの3巻が現れた(1749)後で出版された当
 代の著作も入れられている。これらのうちで最も重要なものの一つは、『形
 成論』の著者、シャルル・ド・ブロスによる旅行記の収集書、『オーストラ
 リア大陸への航海の歴史』*Histoire des navigations aux terres Australes*
 (Paris 1756。1776年弁護士図書館目録参照)であった。この著作の編集
 は、ビュフォン自身が勧めたものだった。しかし、モンボドがその関係に
 気付いていたとは、考えられない。何故なら、彼は一貫して、その著作を、
 ド・ラ・ブロス氏 Monsieur de la Brosse という人物の作としているか
 らである。その名前は、ビュフォンの第Ⅲ巻で引用されているある旅行家
 のものだったのである。この著作は、エディンバラの知識人の間では良く
 知られていた。それは、好古家で言語学者のクレイグフォースのジョン・
 キャランダーによる部分訳が、『知られた大陸オーストラリア』と題された
 収集書のなかに含められて、1766年にエディンバラで出版されていた
 (1776年弁護士図書館目録参照)。1766年とは、モンボドがビュフォン第Ⅲ
 巻を読み(或は、読み返し)たり、数ある草稿のなかでも、モンボド文書
 76を書いたりした年だったのである。モンボドがこの著作を良く知ってい
 た証拠がある。⁽⁴³⁾

『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻は、モンボドが1768-1771年の
 クック船長 Captain Cook の航海記の出版された報告を大いに利用する
 には、少し早く出過ぎたのだった。だが、もっと後の草稿では、それらに
 はっきり言及している。例えば、1773年に出版され、1776年弁護士図書館
 目録に記載されているジョン・ホークスワース John Hawkesworth の報
 告は、タヒチ語 Tahitian と幾つかの太平洋諸言語の語彙集を含んでいた。
 しかし、それは、主として、モンボドの友人ジョセフ・バンクス卿の日誌
 に基づいており、彼から、モンボドは、タヒチ語に関する直接的情報を得
 ることが出来た。⁽⁴⁴⁾『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻では引用されてい

(43) ポケット・ブック1, 1頁, ポケット・ブック3, 6頁。

(44) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 第Ⅱ部, 第Ⅱ章。

るが、ビュフォン第Ⅲ巻には言及のない類似した性格の他の著作には次のものがある。ブーガンヴィル Bougainville 『世界一周航海記』 *Voyage autour du Monde* (Paris 1771),⁽⁴⁵⁾ マテュラン・ヴェッシエール・ド・ラ・クローズ Maturin Veyssière de la Croze 『インドのキリスト教の歴史』 *Histoire du Christianisme des Indes* (2巻, The Hague 1758),⁽⁴⁶⁾ そして、ブノワ・ド・マイエ Benoit de Maillet 『エジプトの記述』 *Description de l'Egypte* (Paris 1735) である。⁽⁴⁷⁾ この最後のものは、ヒュームの下で弁護士図書館に購入された旅行記のうちの一冊であった。⁽⁴⁸⁾

このように、モンボドは、彼の人間の歴史のための多くの人類学的資料に関して、ビュフォンとビュフォンの源泉の幾つかに、恩恵を受けていた。その資料とは、当代の旅行家によって発見された事実であって、その事実が、古代人によって記述された人間の原始的な前社会的状態と、そして、従って、人間の素晴らしい進歩を明らかにするものであることを、ルソーが彼に教えたのだった。当代の哲学者たちは、当時のヨーロッパの人間から資料を引き出すという誤りを犯しており、従って、人間本性は、あらゆる時代と国民において同一であると結論付けていたのである。

ビュフォンが人類の変種に関する章で行ったように、そのような種類の資料を多量に収集すること、それなしには、われわれは、人間の歴史も人間の自然的歴史〔自然誌〕も（それら二つは、「存在の等級」の相補的側面である）完全なものにすることは出来ない。また、それなしには、われわれは、人間の向上と、社会におけるその幸福の増進のための計画を作るこ

(45) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 206-7頁と1776年弁護士図書館目録参照。

(46) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 466-7頁, モンボド文書81と1787年弁護士図書館目録参照。

(47) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 249頁, モンボド文書81, 85と1776年弁護士図書館目録参照。

(48) 「本図書館の管理者と保管者の処置記録簿」, スコットランド国立図書館 (FR 118) を見よ。モンボド文書81「マイエ氏のエジプトの説明からのノート」“Notes from Monsr. Maillet's Account of Egypt”は、1766年9月17日の日付があるが、彼が決定的な時期、1765-66年に読んだ本の中に、それが入っていたことを、示唆する。

とは出来ないのである。その二つは、「倫理学」と「政治学」を含む「道德哲学」として知られている、全てを包括するような人間の研究の目的であった。⁽⁴⁹⁾ 言い換えれば、人間の歴史は、それを反映する言語の歴史と同様に、目的論的であった。それを完成しようとする際に、モンボドは、「存在の等級」における人間の現在の位置と、更に上昇するための人間の潜勢力を確認せよと提案したのであった。人間の歴史は、言語の歴史同様、というのは、文明の等級を反映する言語の絶対的等級が存在するに違いないからであるが、18世紀スコットランドにおいては、道德的目的、そして、実践的目的を持っていた。知識人たちは、社会的、経済的、文化的、そして、言語的、つまり全般的な向上に対する情熱を育んでいた。そして、向上は、価値の或る尺度を含意しており、その尺度は、経験的にのみ確立され得るのであった。

しかし、モンボドが旅行記と歴史書を読むことに対するビュフォンの影響は議論の余地の無いことであるが、われわれは、ビュフォン第Ⅲ巻、モンボド文書76、そして、『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻の間の単純な関係を想定することは出来ない。この時期における弁護士図書館の所有財産は、重要な要因であり、われわれは、保管者と管理者によってなされた本の選択に対するビュフォン（特に第Ⅲ巻）の有り得る影響について、想像をめぐらせることしか出来ない。モンボドの読書に対するビュフォンの影響は、必ずしも、常に直接的であったわけではないだろう。また、唯一のものでもなかった。このような性質の、特に新世界に関する著作は、フランスでも英国でも非常な好評を博していたのだった。⁽⁵⁰⁾（英国では、その

(49) モンボド文書71, 4, 9-10頁。

(50) 例えば、ディドロの『アジア、アフリカ、アメリカに関する地理的、身体的、歴史的報告』*Mémoires géographiques, physiques et historiques sur l'Asie, l'Afrique et l'Amérique*（6巻, Yverdon, 1767年。1776年弁護士図書館目録参照）を見よ。モンボド文書80「南海の旅行記と多くの野蛮な国民についての収集書からのノート」“Notes from a Collection of Travels in the South Sea and of many Barbarous Nations”参照。この中で彼は、その書を、中には全く野獣のような生活をしているものもいる「野蛮な国民に関する多くの珍しい事実…」を収めていると述べ、イエズス会宣教師たちの報告を賞賛している（15頁）。

人気が、様々なインディアン部族との条約や小戦闘に関係する、例えば『スコットランド人雑誌』に当時現れていた、北米からの数多くの軍事的、政治的報告に、部分的には関連していたことは、確かであった。) スコットランドにおける一般的関心の範囲は、モンボド以外の他の人々が読んでいたものから判断できる。⁽⁵¹⁾ 彼の読書において、モンボドが、どれほどその時代と生まれた国の人であったかは、とても強調し過ぎることは出来ないだろう。

3. モンボド文書 109: 「オラン・ウータンとそれが人類であるかどうかについて」

既に指摘されたように、モンボド文書 76 には、「野生の少女」, 「オラン・ウータン」, そして、ビュフォンが指揮を取っていた王の陳列室のモンボド自身の見学への短い言及がある。その陳列室で、「王の庭園」Jardin du Roi の植物の副展示官、ベルナール・ド・ジュスユー Bernard de Jussieu (1699-1777) が、モンボドに、彼がオラン・ウータンと呼んでいるチンパンジーの剥製を見せたのだった。⁽⁵²⁾

それ以後、モンボドは、類人猿と「存在の等級」におけるその位置に心を奪われることになった。モンボド文書 109 「オラン・ウータンとそれが人類であるかどうかについて」 “Of the Orang Outang and whether he be of the Human Species” は恐らく、1766 年かその少し後のものである。それより早いことが有り得ないのは、この論文が、その年に現れたビュフォンの『自然史、一般的及び特殊的、王の陳列室の記述を付す [= 博物誌]』*Histoire Naturelle, générale et particulière, avec la descrip-*

⁽⁵¹⁾ 例えば、『ジョージ・リドパス、スティッチェルの牧師の日記 1755-61 年』*Diary of George Ridpath, Minister of Stitchel 1755-61* (Edinburgh, 1922 年) を見よ。

⁽⁵²⁾ モンボドをジュスユーに紹介したのは、C. M. ド・ラ・コンダミン (モンボドが後に翻訳した「野生の少女」に関する本の編者でもあった) であったことは、まず確実である。ジュスユーの弟ジョセフ Joseph (1704-1779) は、子午線の弧を測定するために、フランス王によって派遣された調査旅行でペルーまでラ・コンダミンに随行した。

tion du Cabinet du Roi の第XIV巻に基づいているからである。この著作に対するスコットランド人の大きい関心を考えると、第XIV巻は恐らく、出版直後に、弁護士図書館の先に収められていた諸巻に加えられたであろう。明らかに、ルソーの第二『論文』の脚注の示唆に従って、モンボドは、「オラン＝ウータン」が実は原始人であることを確証しようとしている。それは、人間をオラン・ウータンのすぐ上に配置したリンネとビュフォンの主張に対立するものであった。モンボドは、主として、ビュフォンの著作の第1及び2章に依拠している。「猿の分類表」“Nomenclature des Singes”と「オラン＝ウータン、即ちポンゴとジョコ」“Les Orang-outang ou le Pongo et le Jocko”である。第2章は、科学者と旅行家からの類人猿に関する多量の資料を収めており、モンボド文書109でモンボドは、その多くを引用している。彼は特に、リンネ、ボンティウス、パーチャス、ガッサンディ、そして、エドワード・タイソンの『オラン＝ウータン、または森の人：または、長尾猿、短尾猿、人間と比較したピグミーの解剖学的構造』(London 1699)に言及する。

モンボド文書109は、『言語の起源と進歩について』第I巻の第2版にモンボドが付加した諸章のうちの二つ、即ち、第II部「オラン・ウータンについて。ビュフォンとリンネが与えている説明の検討」の第IV、V章の基礎である。⁽⁵³⁾

タイソンの本は、ビュフォンは詳細に扱っているが、モンボドは以前に調べていなかったもので、最大級の重要性をもっていた。それによって、モンボドは、「オラン・ウータン」の人間性を否定する点でビュフォンが誤っていると確信したのだが、それは主として、タイソンがその言語能力について疑いを持っていなかったからである。その点で、モンボドが王立協会会長、ジョン・プリングル卿への手紙に書いたような誤解に彼を導いたのは、明らかに、ジュスユーであった。⁽⁵⁴⁾

(53) 『言語の起源と進歩について』第I巻、270-360頁。

(54) モンボド文書、1773年6月16日付け、ジョン・プリングル卿への手紙。エドワード・タイソンの本の複写版が、1966年、アシュリー・モンタギュの序文をつけて、ロンドンで出版された。アシュリー・モンタギュ『エドワード・タイソン医学博士、王立協会会員(1650-1708)と英国における人間解剖学と比較

タイソンの解剖の証拠とビュフォンが引用した幾人かの旅行家の証言を詳細に検討して、モンボドは、「オラン・ウータン」が実は人間であると結論する。つまり、証拠は、知性と科学の能力を持った理性的動物という、アリストテレス的人間の定義に、充分合致するというのである。ビュフォンが誤っているのは、言葉の能力を人間の自然の一部とし、人間が言葉を持たないでいる自然の状態を純粹に想像によるものと見なしていることである。ビュフォンの信念にもかかわらず、分節調音は、長い期間に渡って非常にゆっくりと獲得されたに違いない。言語は、ド・ブロスやビュフォンの想定のように家族の内部でたやすく発達し得たはずがない。ビュフォンの『自然史』の第XIV巻の弁護士図書館所蔵本では、それらの主題を扱っている文章には、羽ペンによる書き込みある。⁽⁵⁵⁾

モンボドによると、リンネは、「オラン・ウータン」が人間の種 species ではなく、類 genus に属することを認めるが、身体的特徴の詳細な観察に基づく彼の分類方法によって誤った方向に導かれているという。モンボドは、事物を精神に基づく類と種に分割する古代の方法を提唱するが、それは、分割と同様に定義を要求するのである。要するに、観察と実験は、その持ち分があるが、論理が、科学の基盤なのである。

解剖学の興隆』(Philadelphia, 1943年)も見よ。モンタギューによると、タイソンが、チンパンジーは「存在の鎖」の中で人間と動物界の他のものとの間の連結環であるという考えを初めて提出した。これは、モンボドの友人で、ビュフォンの翻訳者、ウィリアム・スメリー William Smellie が著書『自然史 [博物誌] の哲学』*The Philosophy of Natural History* (1791年)で表明した見解であった。

この問題全般については、次のものも見よ。B. グラス Glass, 他編『ダーウィンの先駆者たち』*Forerunners of Darwin* (Baltimore, 1968年); A. O. ラヴジョイ「モンボドとルソー」、『近代言語学』XXX号(1933年)275-96頁; オウティス・フェロウズ「ビュフォンとルソー: 一つの関係の諸側面」、『近代語学文学協会誌』LXXV巻, 3号(1960年6月)184-96頁; オウティス・フェロウズ「啓蒙運動におけるビュフォンの位置」“Buffon's Place in the Enlightenment”, 『ヴォルテールと18世紀研究』XXV号(1963年)603-29頁。また、本論文第X章, 注(31)も見よ。

(55) 『言語の起源と進歩について』第II巻, 270-304頁。

分類の方法というものの妥当性についてビュフォンが抱いた疑念については、「個物の科学は存在し得ず、われわれは、個物が属する類か種による以外に、いかなるものの知識も持たないのである」。モンボドのこの一言は、『言語の起源と進歩について』の主張を要約して示している。⁽⁵⁶⁾

(56) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻, 315-6 頁; ビュフォン第Ⅰ巻, 14 頁, 第Ⅱ巻, 160 頁, 第Ⅳ巻, 384 頁, その他各所。A. O. ラヴジョイ「ビュフォンと種の問題」“Buffon and the Problem of Species”, 『民衆の科学月刊誌』LXXIX 号 (1911 年) 464-73, 554-67 頁も見よ。

第 XII 章 アダム・スミスの言語に関する論考

1. コンディヤックの影響

アダム・スミスの短い言語の推測的歴史、『諸言語の最初の形成に関する諸考察』(1761) は、「言語の起源と進歩について」“Of the Origin and Progress of Language” と題されたある講義に源を発していた。それは、エディンバラ大学とグラスゴウ大学で行われた修辞学と文学に関する有名な連続講義の中の一つである。⁽¹⁾『言語の起源と進歩について』と同様、その講義は、ルソーの第二論文、即ち『人間不平等起源論』(1755) に多くのものを負っている。スミスは、この論文に言及しているし、その出版の年に書評していたのだった。しかし、その講義は、一層多くを、ルソーの主要な源泉に負っているように思われる。その源泉とは、モンボドは明らかに直接に手にしたことはないが、スミスは所有していた著作で、コンディヤックの『人間認識起源論』(1746) である。⁽²⁾

-
- (1) 『諸言語の最初の形成と本源的及び複合的諸言語の異なった特質に関する諸考察』 *The Considerations concerning the first formation of Languages, and the different genius of original and compounded Languages* は、最初は、『言語学論集』 *Philological Miscellany* (1761 年) の中で公表された。スミスは、後に、それを『道徳感情論』(1767 年) の第 3 版に付録として付けた。『諸考察』の背景については、アダム・スミス『修辞学・文学講義』J. C. ブライス編 (Oxford, 1983 年) 序論 23-27 頁を見よ。初めの講義については、ブライス、9-13 頁を見よ。

また、『諸考察』に関する次の二つの論文も見よ。C. J. ベリー Berry, 『観念の歴史誌』35 号 (1974 年) 130-8 頁; S. K. ランド, 『観念の歴史誌』38 号 (1977 年) 677-90 頁。

- (2) ブライス、203, 205 頁。ブライスは、コンディヤックが、ウォーバトン主教 Bishop Warburton の『モーゼの聖なる派遣の証明』 *The Divine Legation of Moses Demonstrated* (1741 年, IV 部, iv 章を見よ) のフランス語部分訳、『エジプト人の象形文字に関する試論』 *Essai sur les Hiéroglyphes des Égyptiens* (1744 年) を利用したことに言及している。ウォーバートンは、モンボド自身の源泉の一つでもあったが、(モンボド自身と同様に) 次のものに言及している。ディオドロス・シクルス、第 ii 書; ウィトルウィウス、第 ii 書 I; ニュッサのグ

スミスの論考が限られた範囲のものであるために、綿密な比較は不可能であるが、スミスは、確かに、言語の起源へのコンディヤックの接近姿勢を共有していた。その姿勢は、主としてロックに由来するものであった。但し、コンディヤックは、ロック的認識論を感覚論の方向へ一層押し進めていた。コンディックの諸前提は、次のように要約されるだろう。

言語の諸原則は、文法家の規則によってではなく、その歴史によって明示される。言語の歴史によって、それが、知的構成物ではなく、自然の産物、つまり感覚と人間の必要に対する本能的反応の産物であることが示される。特定して言えば、言語は、人間の抽象の能力によって知覚を分解することが出来ることの結果の産物である。最後に、最初の言語は、文法家によって破壊されてしまっている自然的完璧さを持っていたという。⁽³⁾

スミスが論文の範囲を狭めたことさえ、コンディヤックが提起していた問題によって規定されているのである。スミスは、主として、品詞が発達してきたと考えられる様子と順序を扱っている。この問題は、コンディヤック以後の多くの18世紀哲学者の心を占めていたもので、言語の原始的な考案者は、いかにして必要な抽象と一般化が出来るようになったのか、ということであった。それは、言語の起源についてのルソーの二つの基本的疑問の一つであった。つまり、いかにして人間は、言語それ自体を用いるようになる前に、論理と文法の微妙な区別立てを身につけることが出来たのだろうか、である。⁽⁴⁾

コンディヤックと同様に、スミスは、名詞、動詞、形容詞、前置詞を最

レゴリウス『エウモニウス駁論』*Adversus Eumonium*, xii 章; リシャール・シモン Richard Simon『旧約聖書の批判的歴史』*Histoire critique du Vieux Testament*, i 章, 14-5 頁, iii 章, 21 頁; J. F. ラフィットー Lafitau『アメリカの野蛮人の風習, 最初の時代の風習との比較』*Moeurs des sauvages américains comparées aux mœurs des premiers temps* (1724 年)。『言語の起源と進歩について』第 I 巻, 367-80 頁を見よ。

スミスは、コンディヤックの『認識論』と『感覚論』*Traité des sensations* (1754 年) を所有していた。ブライス, 203 頁を見よ。

(3) ハンス・アールスレフ『英国における言語の研究 1780-1860 年』(Princeton, 1967 年) 24 頁。

(4) 同上書, 25 頁。ブライス, 上記書, 205 頁のスミス『諸考察』を見よ。

も重要な品詞と見なしている。更に、形容詞、そして特に前置詞の発達は、高度な知的洗練を要求したに違いないとされる。⁽⁵⁾ そして、スミスの説においては、この二人の哲学者が共にしているその前提が、重要な論理的帰結をもたらすのである。

再び、コンディヤックと同様に、スミスは、ある品詞を発明する困難さが、それが現れてくる段階を決定すると仮定している。しかし、スミスは、比較と抽象という対になった能力を、唯一の重要性をもつ能力と見てはいない。体系付け *systematization*、言い換えれば「類推の愛好」“*love of analogy*” も存在するという。こうして、抽象の量が、専ら言語の体系性に関連付けられる（『言語の起源と進歩について』ではそうであるが）ことにはなっていない。また、屈折 *inflection* の自然的過程も存在する。それは、抽象を避ける一つの方法である。屈折は、原始的精神が自然における出来事を心に描く際の単純さと一体性を幾分か保持するのである。つまり、それは、出来事名 *event-names*（少なくとも部分的に、コンディヤックに由来するもう一つ概念である）の特質をある程度保持するのである。

最後に、偶然一人々の混交—によって、コンディヤックが考えたような言語的進歩の連続的過程が中断されることが起こり得るという。⁽⁶⁾ 別の言い方をすれば、スミスの『諸考察』は、全くの推測的歴史ではないのである。

2. スミスの言語発達論

モンボドと同じように、動詞は少なくとも「言語の形成への正に最初の試みと同様に古」かったに違いないと信じていたが、スミスは、彼の仮説的説明を、身近な対象物に特定の名前をつける二人の野蛮人から始める。つまり彼は、ロックが提出し、後で放棄した考えを採用する。経験が増大するにつれて、彼らは、次第にそれらの対象物が幾つかの部類に属していることに気付き、それらの語を一般化することが出来るようになるだろう。言い換えれば、彼らは、子供たちがするように、固有名詞から普通名詞（実

(5) スミス『諸考察』（ブライス、205-6頁）。

(6) 同上書、207-16頁。

詞 nouns substantive) へと進むだろうという。⁽⁷⁾

それから、必要が生じて、彼らは、一つの特定の事物を同じ部類の他のものから区別しなければならなくなるだろう。結局のところ、それが達成されるのは、事物の特異な性質を区別する(「緑の木」“the green tree”)ことによって達成されるのであり、更に後には、他の事物に対してそれらが持っている関係の特徴付けること(例えば、「草原の緑の木」“the green tree of the meadow”)によって達成されるであろう。つまり、形容詞(形容名詞 nouns adjective)と前置詞が発達して来るだろう。しかし、それらは、非常に抽象的な品詞であり、ルソーが言ったように、形容詞のうちの「最も形而上的でないもの」(色彩名)でも発明するには働いていたに違いない、「配列あるいは部類分けの、即ち比較と抽象の異なった心的操作」を、言語の発明者たちが行うことが出来たはずがないのである。したがって、最初に言語を生み出した原始人は、抽象を必要としないような一時しのぎの方策を見出さざるを得なかった。⁽⁸⁾

彼らは、名詞の語尾を変化させることによって、すべての範囲の性質(性と数だけでなく)を表すことが出来ることを発見した。そして、同様な手段は、一層困難な前置詞の発明の必要を回避するのに、利用することが出来るだろう(例えば、ラテン語における“fructus arboris”「木の实」: the fruit of the treeである)。これは、いずれにしても、性質と関係を表すより自然な方法であった。というのは、自然においては、性質や関係は、それらを持っている実体やそれらと共に関係を結んでいる co-relative 対象物から分離できないからである。⁽⁹⁾

必要が最終的に形容詞の発明を要求したとき、形容詞が、それらが付けられる名詞と同じ語尾を与えられるのは、同様に自然であった。それは、「すべての言語における類推の基盤である... 音の類似の愛好から」来るも

(7) ブライス, 上記書, 215, 203-5 頁。彼は、類と種の起源の問題 — モンボド自身も『言語の起源と進歩について』で発言した問題に関して、ルソーの『不平等起源論』に言及している。(ブライス, 上記書, 205 頁)。

(8) 同上書, 205-7 頁。

(9) 同上書, 207-13 頁。

のであった。⁽¹⁰⁾

こうして、抽象的な語を形成する困難は、ギリシア語の、そして、程度は低い、ラテン語の曲用 declensions の複雑さに通じて行ったのである。その複雑さは、それらの言語の活用 conjugations においては一層顕著である。

最初に発明された動詞の種類は、恐らく、非人称動詞だったろう。つまり「一語で完結した出来事を表現し、その表現の中に、対象物と観念の中に常に存在する完全な単純さと統一性を保持する」動詞である。⁽¹¹⁾ 例えば、ラテン語の “pluit” 「雨が降る」 (“it rains”) は、「何の抽象も、主体と属性という構成部分への出来事の形而上的な分割も」想定しない。それは、“luet” 「昼である」 (“it is day”) と同様、「精神が自然においてそれを心に抱く完全な単純さと統一性を持った、完結した確言 affirmation、一つの出来事の全体」を表現する。二つの部分への出来事の分割は、「全く人為的であり、言語の不完全さの結果である」。⁽¹²⁾

しかし、出来事の無限の多様性のために、必要に迫られて、人間は、それらを「異なった品詞によって表現される形而上的部分」に分割せざるを得ないのである。つまり、人間は、表意文字を使う代わりに、語をその要素（文字）に分割するようになったのと同じく、出来事を幾つかの語に分割するようになったのである。そして、有利な点と不利な点は、表裏一体であった。アルファベットの発明は、一語を表すのにより多くのシンボルを必要としたが、しかし、それは、書記体系を単純化した。語の発明は、それぞれの特定の出来事の表現をより複雑にしたが、「言語の体系全体が、より一貫性を持ち、より結合を強くし、より容易に保持され、理解されるようになった」ことを意味したという。⁽¹³⁾

動詞がより人称的になると。⁽¹⁴⁾ 代名詞を発明する問題が生じた。極めて抽象的であるから、代名詞の発明もまた、動詞に語尾を付加することで回

(10) 同上書、208 頁。

(11) 同上書、215 頁。

(12) 同上書、216 頁。

(13) 同上書、217-18 頁。

(14) 同上書、216-17 頁。

避された。その結果、ギリシア語のような原初的言語の活用は、その曲用より一層混み入ったものになった。その過程は、ますます体系的で高度に屈折する言語を生み出したが、その複雑さは生まれつきの話し手には問題ではなく、一層単純な構成・合成 composition を保証した。

しかし、二つの国民が混交するときには、支配的な言語の文法は、単純化する。何故なら、個々の人は、当然、古くからの曲用を知らないで、前置詞で補いを付け、活用を知らないので、助動詞を用いて補いを付ける傾向があったからである。⁽¹⁵⁾

要するに、一般的法則としては、「言語がその構成において単純であればあるほど、その曲用と活用においてより複雑でなければならない」し、その逆も真なりである。⁽¹⁶⁾ 前者の場合のこの上ない実例は、ギリシア語である。ギリシア語は、約 300 の語根語 primitives から導き出される非複合的言語 uncompounded language であり、そのことは、新しい語が必要になると、外から借用されるのではなく、本来語から（合成や派生によって）得られたことを証明している。⁽¹⁷⁾

ラテン語は、複合的であるから、文法的には複雑さは少ない。フランス語とイタリア語は、ラテン語より文法的に複雑さが少ないが、従って、その構成においてより複雑である。文法的観点からは最も単純だが、構成において最も複雑な言語は、英語である。⁽¹⁸⁾ スミスは、この単純化の過程を機械の発達に譬えている。「すべての機械は、一般的には、初めて発明された時には、その原則において極めて複雑である。… 続いて現れる改良者は、一つの原則が幾つもの… 動きを産み出すように応用され得るのではないかと見て取る。そのようにして、機械は、次第により単純になり、より少ない車輪とより少ない運動の原則で成果を生み出すのである。」しかし、機械の単純化は、機械をより完全なものにするのに対して、言語の規則の単純化は、反対の結果をもたらす。それは、言語をより冗長にし、耳にしたときの快さを少なくし、古代人の文章構成を容易にしていた、語の

(15) 同上書, 220-21 頁。

(16) 同上書, 221-22 頁。

(17) 同上書, 222 頁。

(18) 同上書, 222-23 頁。

順序入れ換えをする話し手の力を制限するという。⁽¹⁹⁾

3. スミスの『諸考察』と『言語の起源と進歩について』

モンボドがスミスの『諸考察』を完全に良く知っていたことに疑いはない。彼は、『言語の起源と進歩について』においてそれに数回言及している。そして、時にはスミスと見解が異なるけれども、大抵はこの論文に対する賞賛の言葉を述べている。⁽²⁰⁾ 実際、スミスの初めの講義と同じ題目で、しかし、その感覚論的認識論に対立する方向で、遙かに広範な著作を企てるという考えが、部分的には、スミスの言語の起源と発達の短くて一貫しない説明によって促されたことは、有り得ることである。

それがもっと有りそうなことに思われてくるのは、『言語の起源と進歩について』が、初めの講義の文脈における修辞学全般に関するスミスのロック的見解に対する反駁であると思われるという事実によっている。⁽²¹⁾ ひょっとすると、モンボドは、修辞学と文学に関するスミスのエディンバラ講義を聞いたかも知れない。しかし、いずれにしても、彼は、スミスの見解をセレクト協会での論議から知っていたに違いないが、それは、勿論、スミスの道德哲学に潜在し、彼の友人ヒュームを思い出させる懷疑論を含めてのことである。⁽²²⁾

確かに、『諸考察』の視野と主題は、モンボドが気付いたに違いないような明白な方法論的限界を持っている。同時に、『言語の起源と進歩について』とスミスの著作の間には、幾つかの類似点が存在する。そして、時には、モンボドが、非常に異なる哲学的目的を推進するために、スミスの概念を巧みに利用したと思われることがある。(しかし、記憶しておくべきことは、モンボドか、ルソーの第二『論文』、つまりスミスの源泉によっても影響されたということである)。

第一に、モンボドは、ルソーとコンディヤックと同様に — スミスより高

(19) 同上書, 223-24 頁。

(20) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 568, 577 頁; 第II巻, 89, 103, 110-11 頁。

(21) 本論文第VI章を見よ。

(22) 本論文第V章を見よ。

い程度で一次のように仮定した。即ち、言語の漸進的な成長は、増大して行く感覚データの比較から得られる抽象化と一般化の精神の力能を反映すること、そして、従って、ある意味では、現実を分類する緩慢な過程に含まれている「形而上的抽象」の程度に基づく言語の発達には、ある「自然的」順序が存在すること、である。しかし彼には、それが、自然、本能、そして必要によって支配される連続的な器官的過程であったはずだ、と言う積もりはない。それとは、全く逆である。体系的言語は、哲学者＝文法家の思慮深い介入を必要とした。言い換えれば、スミスの説のような自然主義的理論を退けるために、彼は、野蛮な言語と技能の言語の間の伝統的区別を強調するのである。彼は、前者に主要な関心を向けるのではなく、後者に向けている。そして、出来る限り明確にその二つを区別することに関心を向けるのである。野蛮な人々は、限られた程度の言語的体系性を持ち得るだけであり、そしてそれでさえも、たとえ「場当たりの」ad hocであるにせよ、明らかに意図的な介入の結果である。モンボドは、野蛮な言語との関係で、「自然」と「必要」について語るが、彼は、注意して、可能な限りそれらの要因が達成したものを限定している。⁽²³⁾

第二に、スミス同様、モンボドは、世界が伝統的なアリストテレス的範疇(実体、性質、関係、運動等)に従って分類され得るし、また、それらが普遍的に言語に反映されると想定する。

しかし、モンボドによると、それらの範疇は、野蛮な言語では最も進んだものにおいても、非常に不完全に反映されるに過ぎない。そして、それらが言語において正確に表される程度は、その言語の技能の尺度なのである。スミスが、ロック的見地からアリストテレス的類と種に思い付き的な言及をするのに対して、モンボドは、それを彼の主要な主題にする。彼は、言語の歴史を通して、抽象観念の起源と本性(スミスが別のところで扱っている主題)を探究するのである。つまり、スミスが修辞学に関する講義と初期の著作の中で論じている事柄を、モンボドは、『言語の起源と進歩について』の表題の下に包括するのである。⁽²⁴⁾

(23) 『言語の起源と進歩について』第I巻、第III部。

(24) 『言語の起源と進歩について』第II巻、514-39頁。スミスのこれらの主題に関する議論については、本論文第VI及びIX章を見よ。

第三に、スミスと同様に、モンボドは、品詞の発達を重視する。しかし、スミスと違って、彼は、言語的構造の本性と原因が、語彙的範疇 lexical categories によるだけで論じ得るとは、想定しないのである。⁽²⁵⁾

第四に、モンボドは、技能の言語に対する伝統的な語彙的範疇の普遍性を前提とするけれども、スミスとは違って、彼は、原始的言語の発達の説明を、明らかに不十分な資料の上に基礎付けることはしない。スミスが古典語、フランス語、イタリア語、英語に限定しているのに対して、モンボドは、野蛮な言語に関する豊かな資料を利用する。これは、『言語の起源と進歩について』の最も重要な特徴の一つである。

最後に、モンボドは、出来事名（彼は、デュ・アルドとルソーの第二「論文」にもこの考えへの短い言及を見出していたが）という概念を応用する。⁽²⁶⁾ しかし、スミスの他の原則についてと同様に、彼は、それをずっと深く検討し、遙かにより一貫性をもって適用する。⁽²⁷⁾ この点は、ある程度詳しく検討する価値がある。

彼は、自然におけるあらゆるものは他のものと混じり合っているという（スミスにおいては潜在しているに過ぎない）原則から始める。その結果として、原始人が抱く最初の印象も、それが最初の言語に先行していたに違いないのだが、前範疇的経験の固まりであったに違いない。つまり、それらの印象は、何の抽象も含まず、従って、全く観念ではなかった。⁽²⁸⁾

この感覚印象の混乱状態は、分析されていない出来事名に映し出された。この分析されていない出来事名が、モンボドの野蛮な言語の説明にとって土台をなすものである。初めは、野蛮人は、運動、動作主、対象物、その運動が行われるやり方を、自然に存在するがままに、すべてを一固まりに考える。彼が実際に抽象し始めるとき、その最初の観念は、主要な性質と混ざり合った実体や、たまたま彼の注意を引いた付帯状況と混ざり合った運動から成っているだろう。⁽²⁹⁾

(25) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻、第Ⅰ部。

(26) 本論文第X章を見よ。

(27) 『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻、514-39頁。

(28) 同上書、518-20、528-9頁。

(29) 同上書。

こういうことであるから、野蛮な言語は、抽象的に考えられたどんな実体を指す名前も持たないのである。種に属する性質は、個物に属する性質と混ざり合っているだろう。つまり初めには、品詞というより、多数の不完全に分析されたばらばらな出来事名が、存在することだろう。⁽³⁰⁾

野蛮な言語は、形態論も統語論も発達させることなく、その部分的に分析された語彙を拡大し続ける。遂には、それらの言語は、扱い難くなってしまい、技能が、介入しなければならなくなる。モンボドは、最も知力に優れた人々でも、技能の言語を生み出すことが出来ないような予備的段階の存在をはのめかしている。明らかに、幾つかの野蛮な言語に見出される限られた程度の形態論と統語論は、体系化を目指す意識的「場当たりの」試みの結果である。しかし、モンボドがより関心を向けているのは、哲学者＝文法家がその言語を完全に作り替えることが出来るもっと後の段階である。

要するに、形態論と統語論は、概念的分析の自然的産物ではないのである。そして、ギリシア語のような技能の言語は、非体系的な野蛮な言語とは完全に別な部類と見なされなければならないのである。

文法家が実際により首尾良く介入し、技能の言語 — それは(スミスには失礼ながら)常に、そのような複合的な人工物が達し得るかぎりには単純であるはずだが — を形成したときには、それ以前にその言語が構造的に余りに複雑で、単純化されなければならないような中間的段階が、存在したに違いないのである。そのような形において、技能の言語の発達、機械の発明に似ているのである。⁽³¹⁾

言い換えれば、モンボドは、そのような言語を思慮の上に作られた構成体と見なすのであるから、意味的抽象の程度と言語的体系性の程度との間の完全な対応の存在を主張できるし、従って、スミスの機械の直喩を、より妥当性をもって適切に適用できるのである。(スミスは、より進んだ抽象の結果生まれる分析的言語が、機械と違って、退行的であると言わざるを得なかった。) 要するに、モンボドは、精神の進歩と言語の進歩の間により

⁽³⁰⁾ 『言語の起源と進歩について』第I巻, 527-31頁。

⁽³¹⁾ 同上書, 568頁。

密接な並行関係を立てるのである。言語の階層的構造を生み出す抽象の予め決まっている順序が存在する、というのである。しかし、明らかに、抽象の過程自体は、本能的なものではなく、獲得された習慣なのである。

モンボドが、高度に屈折的な言語全般の、そして、特にギリシア語の、優秀性についてスミスの意見に賛成していることは、確かである。しかし、彼は、屈折を出来事名と同一視しないし、ギリシア語を、有機的・器官的 organic 発達によるものと見なすこともしない。全く逆なのであって、屈折は、熟慮に基づいて体系を負担させたものであり、ギリシア語は、意識的思惟作用の最高の達成なのである。

第 XIII 章 ジェイムズ・ハリスの『ヘルメス』の影響

ジェイムズ・ハリス James Harris (1709-1780)

- 1709 ソールズベリーに生まる, 6月20日。ジェイムズ・ハリスとエリザベス・アシュリー夫人, 即ち第三代シャフツベリ伯爵, アンソニー・アシュリー・クーパーの妹の間の息子。
- 1725-33 オックスフォードのウォダム・カレッジ Wadham College と法学院 Loncoln's Inn に通う。
ニュートンとロックに結び付いた経験論哲学を受け入れる。
- 1733-61 ソールズベリーに退き, 研究生活へ。15年間古典文学と哲学に没頭し, 古代人に関する自らの見解を改める。
- 1744 『技能, ... 音楽, 絵画, 詩, ... 及び幸福に関する三論文』 *Three Treatises concerning Art, . . . Music, Painting and Poetry, . . . and Happiness* の初版発行。
- 1751 『ヘルメス: または, 言語と普遍文法に関する哲学的探究』 *Hermes: or, a Philosophical Inquiry concerning Language and Universal Grammar* の初版発行。
- 1752 ジェイムズ・クロウ James Clow 教授, グラスゴウ文芸協会で『ヘルメス』に関する論文を読む。『批評の成立と進歩について』 *Upon the Rise and Progress of Criticism* 出版。
- 1755 『三論文』(1744), アベ・バテュー Abbé Batteux による『文学の原理』 *Principes de littérature* に転載される。
- 1756 トマス・ブラックロック Thomas Blacklock, 『ヘルメス』に依拠した『普遍的語成立形成論 [語源論] に関する試論』 *Essay on Universal Etymology* (Edinburgh) を出版。
- 1760 (?) 『ヘルメスに説明された, アリストテレスによる四品詞の短い説明』 *A Short Account of the Four Parts of Speech*

according to Aristotle, as explained in Hermes.

- 1761 クライトチャーチ選出下院議員。
- 1763-65 海軍本部委員 Lord of Admiralty, 引き続き, 国家財政委員 Lord of the Treasury となる。
- 1765 『三論文』第2版。『ヘルメス』第2版, 『ヘルメス: または, 普遍文法に関する哲学的追究』 *Hermes: or, a Philosophical Inquiry concerning Universal Grammar* の題の下に, 増補, 訂正を行う。
- 1766 モンボドとの文通始まる。
- 1771 『ヘルメス』第3版。
スメリーの『ブリタニカ百科事典』(Edinburgh) 初版, 主として『ヘルメス』に基づく項目「文法」を含む。
- 1772 『三論文』第3版。
- 1773 『ヘルメス』, ダブリンで出版。モンボド, 『言語の起源と進歩について』第I巻を出版。
- 1774 ハリス, 女王付書記兼検査官 Secretary and Comptroller to the Queen となる。
- 1775 『哲学的整理』 *Philosophical Arrangements* 出版, フランス唯物論者への反駁を意図したアリストテレス的論理学に関する著作の一部。
- 1780 12月22日没。
『三論文』のドイツ語訳。
- 1781 『言語学的探究』 *Philological Inquiries* 出版。
『三論文』第4版。
- 1784-85 モンボドの『言語の起源と進歩について』のドイツ語訳。
- 1785 『中世の文学的歴史』 *Histoire littéraire du moyen âge*, 『言語学的探究』の部分訳。
- 1786 『ヘルメス』第4版。ジョン・ホーン・トゥク John Horne Tooke, ハリスとモンボドを攻撃する『パーリーの慰め』 *Diversions of Purley* の第1巻を出版。
- 1788 『ヘルメス』のドイツ語訳。

- 1794 『三論文』第5版。
『ヘルメス』第5版。
- 1794 フランソワ・チュロ Francois Thurot による『ヘルメス』
のフランス語訳。
- 1801 息子、マームズベリ卿編集の『ジェイムズ・ハリス著作集』
The Works of James Harris。
- 1802 『言語学的探究』の新版。
- 1806 『ヘルメス』第6版。
- 1816 『ヘルメス』の新版。
- 1825 『ヘルメス』の新版。
- 1841 『ジェイムズ・ハリス著作集』の新版。

1. 序論

ハリスとモンボドは、本当はもっと早くに出会っていたことだろうが、彼らの文通は、1766年の初めに始まったようである。多分その前の年のロンドンでの出会いに続くものだろう。それ以後、彼らは極めて頻繁に手紙のやり取りをしたが、通常は、ギリシア語とギリシア哲学の様々な側面に関してであった。というのも、二人とも、それぞれの国でギリシア語とギリシア哲学を復興させたいと思っていたのだ。⁽¹⁾

同じ年に、モンボドは、最終的には『言語の起源と進歩について』に組み込まれた草稿の一つであるモンボド文書144の中で、次のように書いていた—ハリスの哲学的文法『ヘルメス』にしばしば言及しなければならないが、それは、この本が、「秩序と方法に従って配分されているそのすべての部分において言語を解明しているような完璧な著作」であるからだ、と言う。⁽²⁾

『言語の起源と進歩について』の中で、モンボドは、ハリスを「学識を尊重しない時代の非常に学識ある人」と説明し、『ヘルメス』[1751]のこと

(1) クロイド, 13, 23, 39–41 頁。

(2) モンボド文書144 (1766年) 49–50 頁。『ヘルメス：または、普遍文法に関する哲学的探究』の初版と第3版 (1751, 1771年) は、1776年弁護士図書館目録に記載されている。私が参照したのは、第3版である。

を、「英国において哲学と優れた書き物に対する鑑識力が存在する限り、読まれ、賞賛されるであろう著作」と述べている。⁽³⁾ 彼は、『言語の起源と進歩について』の初めの二巻における重要な点においては、必ず『ヘルメス』に言及し、ハリスかハリスの源泉を引用する。実際、モンボドがローマの著作家を厳しく排除したこととアリストテレスの注釈者をより広範に扱っていることを別にすれば、彼の古典への言及は、殆どハリスのものと一致する。ハリスと意見を異にすることもありはするが、彼は頻繁に、もっと詳しい説明については『ヘルメス』を見るよう読者に勧めている。⁽⁴⁾ モンボドは、また、ハリスの『三論文』[1744]をも挙げるが、それをプラトンの「分切的方法」“diaeretic method”の最高の実例とする。そして、ハリスの未公刊の『哲学的整理』[1775]を「英語で書かれた最高の形而上学の本」と述べている。⁽⁵⁾ しかし、アリストテレスとその注釈者を除けば、『言語の

(3) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 239, 第Ⅰ巻, 8頁。

(4) 例えば、統語論は、『ヘルメス』で「非常に詳しく、正確に、優美に説明されているので、「その主題についてそれ以上一言も言わない」(『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 343頁)。

(5) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 21-2頁。『三論文』の三つの版(1744, 第2版, 1765, 第3版, 1771年)が1776年弁護士図書館目録に記載されている。意義深いことだが、この著作は、シャフツベリに献呈されている。最初の対話「技能について」“concerning art”は、ハリスの言語に関する見解を要約的に述べている。技能は、理性と意志を含意し、偶然的なものではない。それは、習慣と経験に基づく、つまり学ばれる。技能は従って、自然的世界における法則に支配された出来事と動物の本能的技 instinctive skills とは区別されるべきである。技能は、人間の中の力(或は、活力)であり、人間に特有である。それは、規則の体系によって導かれ、あらゆる技能の始まりは、何か良いもの、必要なものの欠如である。われわれは、森の中の野蛮人として出発し、技能によって自らを引き上げたのである。(「最初の対話」First Dialogue, 1-45頁。)

つまり、ハリスは、技能をアリストテレスの四つの原因(動因、質料因、目的因、形相因)との関係で考える。脚注は、プラトン、アリストテレス、そして、アリストテレスの注釈者、特にアンモニオスに言及している。また頻繁に挙げられているのが、キケロ、クインティリアヌス、そして、スカリゲルの『ラテン語の起源について』(1540年)で、この著作が文法を理性と一致させ、方法に従わせたのだという。

起源と進歩について』の重要な巻(第ⅠとⅡ巻)においては、『ヘルメス』が、古代のものについても当代のものについても、彼にとって主要な源泉となっている。

しかし、それは、単に『言語の起源と進歩について』第Ⅰ巻と第Ⅱ巻におけるハリスとハリスの源泉への言及の数の問題ではない。二つの著作は、目的と精神において類似しているのである。事実、モンボド自身が、二つの著作を相補的なものと見なしたのだった。彼らの目的について言えば、二人とも、ルネッサンス期に始まった長期の「争い」において、現代人に反対して古代人を支持する。つまり、二人とも、ベーコン、ニュートン、ロックと結び付いた流行の経験的哲学に反対し、古代ギリシアの精神の哲学を支持する。流行の経験的哲学を、彼らは、懐疑論と唯物論に道を開いたものと見なしたのだった。もっと特定化して言えば、彼らの意図は、

ハリスの『哲学的整理』(London, 1775年)は、1776年弁護士図書館目録に見られる。これは、アリストテレス的形而上学の詳細な解説である。

ハリスの『言語学的探究』(London, 1781年)は、1782年までには弁護士図書館に入っていた。第1部は、批評の起源と進歩を扱う。人間は、論理学と修辞学が発明される以前に、推論を行っていた。最初の批評家たちは、語の意味に関心を向け、そのことから、彼らは、人間の本性、理性、情念を考察するようになった(7-8頁)。

彼は、優れた著作の不変の諸原則に関心をもつ、哲学的批評を、注釈者、辞典編纂者、文法家の歴史的批評から区別する。前者には、アリストテレス、ハリカルナッセウスのデイオニュシオス、ロンギノス、キケロ、ホラティウス、クインティリアヌスがあり、後者には、シンプリキオス、アンモニオス、アリストテレスに関するフィロポヌス(17-18頁)がいる。ある学芸 liberal art に関して立派に書くためには、われわれは、哲学的に書かなければならない、即ち、われわれは、われわれの批評をアリストテレスの「第一哲学」の上に基礎付けなければならないのである(19頁)。『ヘルメス』128頁、『哲学的整理』367頁も見よ。

当時の歴史的批評家の中に、彼は、モンボドによって頻繁に言及されている人を含め幾人かの文法家を挙げている。ラスカリス Lascaris, ガザ Gaza, フォシウス Vossius, J. C. スカリゲル, サンクティウス Sanctius である。彼は、彼に初めて文法と言語の合理論的観念を与えてくれた「計り知れない価値を持つ本」として、サンクティウスの『ミネルウァ』*Minerva* を選び出している(21頁)。

ロック的経験論を反駁し、人間の思考の基礎としてアリストテレス的論理学を再興することである。

それは、結局、啓蒙運動の支配的精神を拒否すること、そして、ロックがアリストテレスを凌駕したという受け入れられていた見解をひっくり返すことになるのだった。その見解は、ハリス自身が1740年頃までは抱いていたものだったが。しかし、モンボドとハリスは、当代の経験論の対立物として、古代の合理論を復活させようとはしない。そうではなくて、純粹理性を好ましく思っていたが、彼らは、合理論と経験論が相補的であることを示したいのである。そして、当時の哲学が、古代人が達成したことに依存していることを示したいのである。『言語の起源と進歩について』は、観念の批判的歴史における一つの演習とも見て良いだろう。ロックがアリストテレスに恩恵を受けていることを証明することによって、モンボドは明らかに、啓蒙哲学者たちのロック的概念を、彼らが非論理的にも反対している古代の哲学者における本来の基盤にまで回復させたいのである。

それらの目的が追究される精神について言うと、二人の著作は、新プラトン主義的伝統に満たされている。実際、「アリストテレス的」文法と同じ程に新プラトン主義的伝統において、ハリスのモンボドに対する影響を最も明瞭に跡付けることが出来るのである。

新プラトンの伝統に照らして見ることで、ハリスとモンボドは、ストア哲学、プラトン哲学、アリストテレス哲学を単一の永遠の哲学の諸側面と見たのだった。それは、主として、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』で絶えず言及されている、キケロ、そして、ポルフェリオス Porphyry、ヤンブリコス Iamblichus、アンモニオス Ammonius のような古代後期の著作家に由来する態度である。変わる事のない普遍的真理というこの新プラトン主義的見方は、常に人間を啓発して来たのであるが、プロティノス Plotinus (205-70) によってプラトン主義的伝統に組み込まれたストア主義的概念に、多くのものを負っている。⁽⁶⁾ しかし、ストア哲学

(6) C. A. パトリディーズ Patrides 編『ケンブリッジ・プラトン主義者達』*The Cambridge Platonists* (Cambridge, 1969年) 序論、各所。

は、彼が『ヘルメス』を読み、新プラトン哲学を受け入れるずっと前に、モンボドに対して形成期の影響を及ぼした別個の流れを成してもいたのである。

ストア哲学は、(前ソクラテス的、プラトンの、アリストテレス的要素を含んでいたが) キケロ、セネカ Seneca、そして、アリストテレスに対するギリシアの注釈者を經由して、ルネッサンスに影響を与えた。それはまた、ここでもキケロとセネカを經由して、ローマ法に永続的影響を及ぼしていた。これは、自然法の伝統において最も明瞭に見て取ることの出来る影響で、そこでは、それは、アリストテレス的概念とキリスト教的概念に結び付いていた。ローマ法との結び付きがあったために、ストア主義的概念は、スコットランドの法哲学に浸み渡っていた。弁護士図書館の監督教会派の創設者、ジョージ・マッケンジー卿は、有名なストア主義者であった。そして、初期のモンボド文書は、セレクト協会と非常に密接に結び付いているが、キケロの法哲学に染められている。実際、人間の合理性と秩序立った宇宙という理想像を強調する伝統的ストア主義の見方は、モンボド文書全体と『言語の起源と進歩について』そのものに行き渡っている。⁽⁷⁾

ストア哲学の魅力は、それが、認識論、論理学、倫理学を一つの合理的全体に結合するすべてを包含する哲学を提供するところにあった。宇宙は、能動的精神と受動的物質から成っている。そして、すべての事物の組織原理は、秩序立った発展を神意によって決定するもので、能動的精神、つまり「生命原理」pneuma である。これは、成長した人間においては、「ロゴス」logos (理性) になる。同等に合理的な一群の道徳的真理は、自然の首尾一貫性と対応するのであるから、人間の「ロゴス」によって、人は、宇宙的秩序と道徳的秩序の双方を把握することが出来るのである。こうして、人間は、神あるいは、あらゆるものに内在する世界靈魂 world-soul と考えられる普遍的自然、の聖なる合理性を分かち持つことになるのである。⁽⁸⁾

(7) 本論文第Ⅱ, Ⅲ, V, VI章を見よ。

(8) A. A. ロング Long『ギリシアの哲学：ストア哲学者、エピクロス主義者、懐疑論者』*Hellenistic Philosophy: Stoics, Epicureans, Sceptics* (London, 1974年) 118-209頁。

18世紀までに、ストア哲学は、広く普及を遂げ、とりわけシャフツベリとバトラー主教 Bishop Butler に影響を及ぼした。「道徳的ニュートン主義」の大流行は、リードのスコットランド常識哲学がその著しい例であるが、多くをストア主義的精神に負っている。そして、『言語の起源と進歩について』は、リードのものに類似しているが、熟慮の上でギリシア的起源に戻っていく、精神の分析を提示するものと見られるだろう。実際、モンボドの全体観は、フランシス・ハチスン、即ちシャフツベリの弟子で、グラスゴウにおけるギリシア復興の創始者、常識哲学の先駆者のものに似ている。そして、彼の目的は、同一である。つまり、ホブズとマンドヴィルに結び付いたものであれ、ロックとヒュームに結び付いたものであれ、懐疑論と唯物論と戦うことである。ストア哲学を新プラトン哲学から分離することは、困難であるが、モンボドの思考におけるストア主義的傾向によって、彼は、同じ問題に対するハリスの新プラトン主義的反応を受け入れ易かったに違いない。⁽⁹⁾

モンボドは、『ヘルメス』を、啓蒙運動の発展の種を撒いた著作であるロックの『人間知性論』(1690)を凌駕したものと見なし、ロックによるアリストテレスの批判が、スコラ学者による誤った叙述に基づくものと主張する。「しかし、ハリス氏がギリシア哲学の宝物をわれわれに開いてくれた今となって、まだロック氏を哲学の標準的著作と考えるのは、穀物が発見された後でもドングリを食べ続け... ているようなものであろう」。⁽¹⁰⁾

モンボドがハリスによる純正なギリシア哲学の再発見と見たものは、主として、後期(5世紀終わりと6世紀初め)のアレクサンドリア学派の新プラトン主義的注釈者、例えば、アンモニオス、シンプリキオス、そして、キリスト教徒のヨアンネス・フィロポノス John Philoponus に基づいていた。ポルフェリオスとヤンブリコスに倣い、それらの学者は、アリストテレスとプラトンの一致を強調する傾向があった。モンボドが、彼らは、それ以後失われてしまった哲学的著作を利用できたので、アリストテレスの難解な部分を解明することが出来たのだと信じたのは、ある程度は

(9) 同上書, 246-7 頁。

(10) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 53 頁。

正当である。⁽¹¹⁾ しかし、ハリスの新プラトン主義は、それ以上のもので、彼の伯父のシャフツベリ卿と17世紀のケンブリッジ・プラトン主義者の影響を反映している。そして、既に『言語の起源と進歩について』に取りかかっていたとき、モンボドは、ハリスの見解と一致するように彼のアリストテレス主義を修正したのだった。

その関係において、モンボドの現存する最も初期のハリスへの手紙は、1766年3月26日付けのものだが、興味深い。この手紙は、『言語の起源と進歩について』の創まりに関して相当の重要性をもっているが、『ヘルメス』の第2版(1765)についてハリスに感謝し、1764年、パリの王立図書館(後の国立図書館)をモンボドが訪問した結果として、既に『言語の起源と進歩について』に取りかかっていることをはっきり述べている。このパリ訪問は、ダグラス事件のための調査を目的とし、その有名な訴訟事件はやがて弁護士として彼に名を成さしめることになったのだった。彼は、このように書いている。「私は、一つの著作をもくろんでいます、それは、あなたの『ヘルメス』に対する... 下手な第二部にはならないように、... 人間のすべての技能のうちのこの最も素晴らしいもの、言葉の技能の起源と進歩を明らかにするものです。そのことを続けて考える気持ちに私を仕向けたのは、アメリカで話されている幾つかの極めて野蛮で、不完全な言語の研究ですが、私がこの前パリに行ったときに王の図書館から借りた文法と辞典から知ったものです。」⁽¹²⁾ つまり、彼は、『言語の起源と進歩について』を『ヘルメス』の続編になるものと述べながらも、ハリスの哲学的文法が、何らかの特定の仕方で『言語の起源と進歩について』を書かせる気にさせたのではないと言うのである。ロックによる精神の歴史の反駁として、言語的研究を公表するという考え自体も、彼の友人の影響によるものではないのである。しかし、モンボドは、ハリスの「諸著作」全般に対する大きい恩恵を認めている。「あなたのこれまでの著作が初めて私をギリシア哲学に導いて下さったように、今回の御著作『ヘルメス』

(11) 『言語の起源と進歩について』第I巻、56頁、注。

(12) ウィリアム・アンガス・ナイト William Angus Knight 『モンボド卿と同時代人数名』 *Lord Monboddo and Some of his Contemporaries* (London, 1900年) 49-50頁。

は、... ギリシア哲学の研究に対する気持ちを生き返らせて下さいました。決して全く消えてしまっていたわけではありませんが、法律業務の忙しさの中で、しばらくの間失われていたのです。」⁽¹³⁾ モンボドの教育について分かっていることからすれば、この言葉を文字通りに受け取ることは出来ない。モンボドのアリストテレス主義は、若い頃の先生から受けたものであったし、アバディーンキングズ・カレッジの伝統的雰囲気からも、また、スコットランドの法哲学の訓練から受けたものであったように思われる。それに加えて、アバディーンでは、彼は、シャフツベリの弟子で、北部におけるいわゆる「ギリシア復興」の指導者、トマス・ブラックウェル Thomas Blackwell のマーシャル・カレッジの講義に出席していたのだった。⁽¹⁴⁾

モンボドは、勿論、ハリスを喜ばせようと言っているのだろうが、それは、彼の性格には調和しないものであろう。どちらかと言えば、彼が言っているのは、第2版(1765)が出たばかりであったハリスの『三論文』(1744)が、アリストテレスに対する若い頃の情熱を再び呼び覚まさせたことかも知れない。二つの版とも、1776年弁護士図書館目録には記載されている。実は、『ヘルメス』の初版と第3版(1751, 1771)も記載がある。モンボドが、その初版で『ヘルメス』の哲学的部分を既に知っていたという可能性は、殆どないようである。但し、彼が、ハリスの「アリストテレス的」文法に関する見解について、トマス・ブラックロック Thomas Blacklock か、ひょっとするとハリス自身の『短い説明』(?1760)を通して知っていたことは有り得る。1766年以前の日付のあるモンボド文書には、『ヘルメス』の影響の印がないばかりか、その年の3月のこの熱烈な手紙を見ると、モンボドは、ハリスの主要著作のことをそれ以前には何も知らないように思われるのである。彼は、直ちに、一般的観念、「すべての科学と知識の基盤」を扱っているアリストテレスに係わる章を「むさぼるように... 読み耽りました」と言っている。それだけではなく、彼は、アリストテレスに「完全にのめり込んで」と告白し、アリストテレスがプラ

(13) 同上書。

(14) 本論文第Ⅱ章を見よ。

トンの「熱狂と神秘的な精神」からギリシア哲学を救い出したと見ているという。特に彼は、プラトンの観念の理論の「神秘的で謎めいた言い回し」をアリストテレスのその明晰さと対比する。⁽¹⁵⁾ これは重要なことである、何故なら、モンボドの非妥協的なアリストテレス主義は、『ヘルメス』の大部分の、少なくとも、文法的部分と対置されたものとしての哲学的部分の、新プラトン主義とは、全く食い違っているからである。それはまた、『言語の起源と進歩について』の出版された本文とも食い違っている。出版されたものは、ハリスと彼に影響を及ぼした新プラトン主義者たちに、多くを負っている。明らかに、1766年3月には、モンボドは、まだ『ヘルメス』を余り良く知っていないのである。(または、彼がその著者の新プラトン主義的見解にはっきりと批判的態度を示している、と見ることも出来るが、それは、モンボドの手紙の調子とは合わない解釈になる。) われわれはこうして、ハリスの新プラトン主義は、1766年3月より少し後までは、即ち、モンボドがパリで言語の歴史の研究を始めた18箇月くらい後の時点では、彼に殆ど影響していないか、全く影響していない、と結論せざるを得ないのである。⁽¹⁶⁾

スコットランド啓蒙運動における新プラトン主義の地位を考えると、そのモンボドへの影響のこの遅れがいかに驚くべきものであるかに注目することも、簡単に触れるだけの価値がある。それは、啓蒙運動を予示した監督教会派による復古時代の文化的復興、弁護士図書館の創立をもたらした復興を考えても、驚くべきことであるのは言うまでもない。ケンブリッジ・プラトン主義者は、18世紀啓蒙運動の温和派の指導者たちに気に入られたのと同じ理由で、17世紀後期の監督教会派の学者たちに人気があった。その理由とは、一方でホッブズ主義的唯物論に反対し、他方でカルヴィン主義の偏狭さに反対したことであった。しかし、温和派は、彼自身ケンブリッジ派に多くを負っていたシャフツベリに一層大きい影響を受けていた。実際、シャフツベリの道徳感覚の概念は、ヒュームの懐疑論に反対し、19世紀もかなりの時期まで英国の哲学を支配していたスコットラン

(15) ナイト、上記書。

(16) 本論文第XIV章を見よ。

ド常識哲学の起源であった。⁽¹⁷⁾

ハリスの『ヘルメス』自体は、『言語の起源と進歩について』第I巻の出版以前にも温和派の間で相当の人気を博していた。この著作は、例えば、早くも1752年に、グラスゴウ文芸協会で論議の対象となった。この協会は、ギリシアの復興と言語的問題に密接な係わりを持っていたし、モンボドは、その会員を何人か知っていた。⁽¹⁸⁾ その上、1756年には、モンボドの親友のトマス・ブラックロック（その言語の起源に関する考えが『言語の起源と進歩について』で論じられているが）は、『ヘルメス』に基礎をおいた『普遍的語成立形成論〔語源論〕に関する試論』を出版した。そういうことだから、恐らくモンボドは、少なくとも間接に、ハリスの「アリストテレス的」な文法的見解をある程度は知っていただろう。

それでも、1766年のダグラス事件の結審まで、或は、1767年に裁判官になるまでは、モンボドは、明らかに自分の職業に没頭していて、新プラトン主義に照らして、アリストテレスの哲学全体を考察し直すことは出来なかった。

もしモンボドがアリストテレスの新プラトン主義的解釈に説き伏せられなかったとすれば、『言語の起源と進歩について』は非常に違った著作になっていたことだろう。彼は、ハリスよりもアリストテレス主義者の部分を多く残していたが、彼の新プラトン主義的伝統一般、特殊的にはアリストテレスに関するアレクサンドリアの注釈者たちへの言及は、ハリスより充分なものであるように見える。そこで、『言語の起源と進歩について』は、部分的には、アリストテレスとの関係における新プラトン主義的諸観念の歴史を重視している、ハリスに関する博学な注釈と見ることも出来よう。

新プラトン主義的伝統に従って、モンボドは、神話的なヘルメス・トリスメギストス Hermes Trismegistus を文字の発明の栄誉を与えられているエジプトの知恵の神、トート Thoth と同一視する。彼はまた、ピュタゴ

(17) ジェイムズ・マコッシュ James McCosh 『スコットランド哲学』 *The Scottish Philosophy* (New York, 1875年) を見よ。

(18) 本論文第Ⅶ章を見よ。

ラスとアレクサンドリアのキリスト教的プラトン主義者、フィロン Philo, クレメンス Clement, オリゲネス Origen の貢献を認める。⁽¹⁹⁾

両著作には、プラトン主義の継承を表す名前、プラトン、プロティノス、ポルフェリオス、ヤンブリコス、そして、プロクロス Proclus が、しばしば現れる。しかし、モンボドは、特にポルフェリオスによるピュタゴラスとプロクロスの伝記とポルフェリオスのアリストテレス的論理学への有名な序論を活用する。⁽²⁰⁾ ポルフェリオスとその弟子ヤンブリコスが重要であったのは、彼らがプラトンとアリストテレスを一致させる傾向を開いたからであった。その傾向は、アレクサンドリアで学んだ、新プラトン主義の教義の偉大な統合者、プロクロスによって引き継がれた。しかし、アンモニオス、シンプリキオス、そして、ヨアンネス・フィロポノスに代表される、アレクサンドリア学派の決定的な点こそ、モンボドが最も関心を持っているものである。というのは、これらの人々は、アリストテレスを(プラトンの『ティマイオス』 Timaeus と並んで) 論理学、形而上学、自然哲学の最高の師と見なしているアリストテレスの注釈者だったからである。⁽²¹⁾

ハリスとモンボドの二人は、自分たちを、ケンブリッジ・プラトン主義者の鋳型の中の心の大きい合理論者と見ているように思われる。つまり、彼らは、科学を頭から拒否はしない(モンボド文書の中には、初期にはニュートンを賞賛していたことを示すものがある)が、ベーコン的経験論の唯物論的、懐疑論的傾向に反対するのである。そして、ケンブリッジ派の人々と同様に、二人の主要な攻撃目標は、宇宙は、物質の運動の偶然の産物であって、精神によって影響されることはないというボッブズ主義的信念である。(モンボドは、実は、1766年にはホッブズについて殆ど知らな

(19) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 24 頁。

(20) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 243-53 頁注。『ヘルメス』39, 95, 431 頁。

(21) 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 65, 67, 69, 70, 72, 107, 200 頁。『ヘルメス』4, 10, 17, 55, 59, 87, 193 頁等。チャールズ・ビッグ Charles Bigg 『アレクサンドリアのキリスト教的プラトン主義者』 *The Christian Platonists of Alexandria*, 改訂版 (Oxford, 1913 年) を見よ。

かったが、ロックの方を同じ唯物論思想派に属すると見なしていた。)したがって、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』の中心的主題は、カドワース Cudworth のものと同じである。即ち、普遍的秩序の回復を、「存在の等級」の伝統的なキリスト教化された形態を建て直すことによって果たそうとするものであるが、「存在の等級」の考えは、宗教的文脈から切り離されて、ロックを経由して18世紀に流れ込んでいたのだった。モンボドは、カドワースの主要な著作を直接に知っていた。『宇宙の真の知的体系』*The True Intellectual System of the Universe* (1678) と1731年に死後出版された『永遠にして不易の道德性に関する論文』*A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality* である。⁽²²⁾

世俗化された形態における「存在の等級」の概念は、18世紀には広く行き渡っていた。そして、恐らく意義深いことだろうが、それは、スコットランドでは特に影響力を振るっていたように思われる。元来、その概念は、プロティノスによって、アリストテレスの『動物誌』*Historia animalium* と『動物部分論』*De partibus animalium* から、そして、プラトン主義的「充全の原理」“principle of plenitude” から引き出されたのであった。そして、その後の発展は、トマス・アクイナスを通じてスコラ哲学に永続的影響を及ぼしたディオニシウス・アレオパギタ Dionysius the Areopagita (偽ディオニシウス Pseudo-Dionysius) は勿論、新プラトン哲学者のプロクロス、ポルフェリオス、ヤンブリコスによって影響されたのだった。カドワースの言葉によると、それは、「自然における完璧さの等級

(22) カドワースについては、次のものを見よ。パトリディーズ、上記書；グンナー・アスペリン Gunnar Aspelin 「ラルフ・カドワースのギリシア哲学の解釈：英国の哲学的諸観念の歴史の研究」 “Ralph Cudworth's Interpretation of Greek Philosophy: A Study in the History of English Philosophical Ideas”，『イエーテボリ高等学校年報』*Göteborgs Högskolas Årsskrift*, XLIX 巻 (1943 年) 1 号；J. A. パスモア Passmore 『ラルフ・カドワース：一つの解釈』*Ralph Cudworth: An Interpretation* (Cambridge, 1951 年)。

J. L. モスハイム Mosheim がカドワースを編集し、翻訳した。『この宇宙の知的体系、または自然の事物の真理について、原本解説』*Systema intellectuale huius universi seu de veris naturae rerum originibus commentarii* (Jena, 1733 年) で、モンボドが用いたのは、この版であった。

即ち梯子で、生きていて生命のあるものが無感覚で生命の無いものの上にある、理性的なものが感覚的なものの上にあるように、一つのものが他のものの上にあるようになっている」。⁽²³⁾

『言語の起源と進歩について』と『ヘルメス』においては、カドワースにおけると同様に、「存在の等級」の概念は、絶対的真理の判定基準としての生得観念の地位と切り離すことは出来ない。人間が単独物を理解するのは、それらのものの普遍的な理解可能な本性の観念を通じてであると考えられている。そして、人間精神は、われわれが神の理性的本性に与ることを可能にする聖なる閃きを持っていると信じられている。したがって、物質ではなく、精神が、すべての運動と意識の基礎なのである。⁽²⁴⁾

ハリス、モンボドの二人とも、無邪気な形での生得観念の教義を退けるが、理性的諸原理の存在は受け入れる。それらは、ストア主義的、新プラトン主義的「種を宿す諸原理」“*rationes seminales*”, つまり、聖なる真理と徳の生得的で永遠の諸原理である。そのような「共通観念」“*common notions*” という考えは、チャーベリのハーバート、シャフツベリやトマス・リードが抱いていたもので、彼らにモンボドも、一般的には、賛成した。その考えは、博物学者ジョン・レイ John Ray も支持していたが、この人の『創造の御業における神の知恵』*Wisdom of God in the Works of Creation* (1691) は、モンボドの愛読書の一つであった。レイは、ケンブリッジ学派の信奉者であり、そして、「共通観念」は、すべての人に直接的に明白なものであって、ケンブリッジ・プラトン主義にとって中心的である。ハリスが言うように、それらの「共通観念」は、人間の非物質的、自動的精神の「内的活動力」“*internal vigour*” を構成する。それらは、宇宙に生命を与え、それを自然の精神、普遍的調和を産み出す遍在する精神に

(23) パトリディーズ, 上記書, 35 頁。A. O. ラヴジョイ『存在の偉大な鎖: ある観念の歴史の研究』(Cambridge Mass., 1936 年, repr. New York, 1960 年) も見よ。

(24) 同上書。S. I. ミンツ Mintz『レヴァイアサン狩り: トマス・ホッブズの唯物論と道徳哲学への 17 世紀の反動』*The Hunting of Leviathan: 17th Century Reactions to the Materialism and Moral Philosophy of Thomas Hobbes* (Cambridge, 1962 年) 5 及び 6 章も見よ。

よって目的因の方に整然と向ける、聖なる精神と同系の生得的な能動的力能である。⁽²⁵⁾

したがって、魂は、「白紙状態の筆記板」*tabula rasa*（そのようにロックは主張していると考えられた）ではなかった。そして、人間の精神は結局のところ、事物の世界と調和しているのであった。共通観念は、「インテレクトゥス・アゲーンズ」“*intellectus agens*”，つまり知的動作主を通じて、魂を真理へと導くのである。この精神の創造的原理は、トマス主義的概念で、重要なことだが、モンボドによってかなり詳細に論じられている。実際、モンボドとトマス・アクイナスの体系の間の際立った相似は、主として、両者が、自然法の伝統を構成しているストア主義的、キリスト教的でアリストテレス主義的諸観念の混合に強く依存していたという事実が原因である。⁽²⁶⁾

しかし、それらのストア主義的で新プラトン主義的観念は、どのようにして、ハリスとモンボドが共有していた言語に対する態度と結び付くのであろうか。特に、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』で詳述されている「アリストテレス的」哲学的文法に対する、それらの観念の関連性は、どういうものであろうか。それらの観念が、アリストテレス的文法に或る倫理的次元を与えた、というのが答えである。そして、そのことは、更に、ストア哲学によって言語に割り振られた中心的役割に依存していた。その役割は、ストア哲学が中世哲学、特にトマス主義的哲学において、また、学識の統一性のルネッサンス的概念において保持していたものであった。

ストア哲学は、自然学、論理学、倫理学を単一の一貫した体系の範囲内に包含していたけれども、「論理学」がその鍵であった。「論理学」と呼ばれたものは、修辞学と弁証法に分けられ、弁証法は更に言語と意味される事物に分けられていた。言い換えれば、論理学は言語と同一視されていたのである。そして、それは、文法と修辞学だけでなく、認識論をも含んでいた。モンボドは、この基本的関連を重視する。つまり、「ロゴス」は、成

(25) パトリディーズ、上記書、149頁以下、217頁以下、223頁。

(26) 同上書、5、149-50頁。

長した人間に特有であり、理性と言葉の両方を意味する。そして、すべての知識は、道徳的知識も含めて、われわれの観念と自然における現実の事物との一致に存するのであるから、内的談話（「ウェルブム・メンティス」 *verbum mentis*）は、自然と理性に一致した生活にとって、必須のものである。⁽²⁷⁾

要するに、ハリスとモンボドにとっては、ストア哲学者にとってと同様に、言語は、理性を表現し、従って道徳的世界と物理的世界を仲介するのである。しかし、ハリスとモンボドにとっては、言語の中心的役割は、ストア哲学よりむしろアリストテレスや新プラトン主義者と結び付いており、また、J. C. スカリゲルとサンクティウスによって再興された中世のアリストテレス的伝統に最も完全に表現されている、ある基本的区別に依存しているのである。

ハリスとモンボドは、聖なる精神が宇宙に浸み渡っていると信じているが、自然は、物質に埋め込まれた理性なのである。理性の聖なる閃きが最初は物質と感覚の中に没しているというこの新プラトン主義的考え方は、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』にとって基本的である。とはいえ、当然のことながら、モンボドは言語の「進歩」を辿るのであるから、後者において、それはよりはっきり現れている。事物の形相（本質）を抽象することによってのみ、人間は、自らを「非物体的」“unbodied”な聖なる理性のほうへ引き上げるのである。人間は、事物の世界を（「知的動作主」 *intellectus agens* の助けによって）正確に反映する抽象的普遍物からなる一つの知的世界を、ゆっくり創り上げる。つまり、知識それ自体は、分離され、整理されるまでは、物質の中に乱雑に、埋められたままなのである。これは、初期のモンボド文書で追究されているキケロ的主題である。『言語の起源と進歩について』においては、モンボドの目的は、言語が次第に抽象観念を表現できるようになるに応じて、その過程がどのように言語の発達に映し出され、また、それによって助けられるのかを示すことなのである。

言い換えれば、ハリスとモンボドは、ストア的、アリストテレス的、プ

(27) A. A. ロング、上記書、124-5頁。

ラトンの諸概念を総合するのだが、アリストテレス的質料形相の理論、即ち質料と形相、そして、形相の階層構成の説が、彼らの言語の一般的見解にとって中心的なものなのである。

質料と形相の基本的区別に従って、ハリスは、モンボドと同様、音声と観念、即ち、言語の質料的側面と形相的側面をはっきり区別する。「アリストテレス的」文法と結び付いてはいるが、この音声と観念の区別は、元来は、ストア哲学者によって立てられたのだった。事実、ストア主義的論理学は、言語記号の三つの側面を認めた。音、意味、そして、意味を持った音によって意味される対象である。ハリスが理解したように、ストア主義的論理学は、文法の親であった。⁽²⁸⁾

同じ区別が、しかし、新プラトン主義的伝統に現れている。例えば、カドワースは、純粋理性が物質の中に埋もれている、自然における質料と形相の混在状態を、言語における状況と対応させる。人間の精神の純粋理性（「ウェルBUM・メンティス」）、つまり談話の基礎に横たわる普遍的精神的構造は、外的談話（「ウェルBUM・オーリス」 *verbum oris*）に具現化された理性と対照をなすのである。後者もまた、物質の中に埋もれた理性であって、言い換えれば、自然が聖なる知恵に刻印されるように、純粋理性に刻印された意味を欠いた分節音なのである。⁽²⁹⁾

同様に、ハリスとモンボドは、倦むことなく、観念の音声に対する、即ち精神の物質に対する優越性を強調する。観念は、言語の様々な音声的実現の基礎に横たわる単一で不変で普遍的な論理的＝意味的体系を表している。そのような基礎をなす普遍的形相の存在は、いかに古い或は遠い土地のものであれ、すべての言語を翻訳することが出来ることによって証明される。そして、すべての言語のこの「共通の素性」“common identity”は、普遍的、或は哲学的文法の主題である。「事物」が記号より卓越しているように、観念は、音より上位にあり、普遍文法は、特定言語の文法より上位にあることになる。⁽³⁰⁾

(28) 同上書、131-9頁。

(29) パトリディーズ、上記書、303頁。

(30) 『言語の起源と進歩について』第I巻、v-vi、42-3、181-3頁。『ヘルメス』162、301、305-7、311-2、362-5、392頁以下。

ハリスとモンボドだけが、抽象観念を人間の科学にとって決定的に重要なものと見なしたのではない。18世紀の哲学者の一般的見解では、抽象は、思考の基礎であり、人間の知的進歩は、抽象と構成という対になった能力によって、諸現象を分析し、分類することに依存しているのであった。人間は、知覚のデータから出発し、定まった段階によって次第に一般的になって行く一連の観念を通じて、上昇するのである。問題は、そこで、それらの抽象観念の地位は、どういうものか、であった。ホップズとロックの主張によると、語は、話し手の主観的観念を反映するだけで、現実的或は形而上的な類と種の見地からする事物の構造を反映するのではないのであった。その上、語がその記号となっている抽象観念は、普遍的真理を表すものではないとされた。⁽³¹⁾

ロックのように、ハリスとモンボドは、素朴な形での生得観念説を退けるが、既に見たように、彼らは、われわれの知覚によって「誘発され」“occasioned”る潜在的な理性的諸原理の存在を想定する。それらの新プラトン主義的「共通観念」は、精神が知識の芽（「スキエンティアールム・セーミナ」*scientiarum semina*）を含んでいるというトマス主義的教義からそれ程離れてはいない。つまり、「知的動作主」*intellectus agens*は、事物自体から理解可能な種を抽象するけれども、精神は、実在に到達する傾向を持つ。したがって、抽象は、百科全書家の多くが信じたように、ただたまたま、われわれがそれによって事物について考えるしかない過程である、というのではないことになる。そうではなくて、ハリスとモンボドにとっては、抽象観念は、知的「形相」、類と種と同一なのである。類と種は、普遍的理性と「科学」、つまり論理に基づいた安定して確実な知識の統一的で、普遍的に妥当な体系の基礎である。それらはまた、「存在の鎖」Chain of Being、即ち聖なる世界、知的世界、物理的世界を統一する類と種の見えない鎖を反映する普遍物でもあるという。⁽³²⁾

抽象は、理性の基礎であるのだから、それはまた、言語の基礎でもある。言語は、思考を表現するために形成されたのだからである。更に、言語は

(31) 本論文第V章を見よ。

(32) パトリディーズ、上記書、26, 132, 138, 141, 149頁以下, 217頁以下, 258, 304頁, A. O. ラヴジョイ、上記書も見よ。

必然的に、事物を類と種に分類する。「変化する特殊物の無限」“the infinity of changing particulars”を反映するような言語は、存在不可能なものであろうし、また、いかなる言語も、固有名のみから成ることは有り得ないのである。そして、言語は、精神（諸観念）の表現であるから、「その表現の過程の中にある精神を眺めること」と観念の起源を発見することによって初めて、われわれは、言語の理論に到達できるのである。アリストテレスが主張したように、精神の基本的過程は、抽象の生得的能力による、上昇して行く抽象性の程度に応じた、感覚データからの観念の漸進的分離であることに、われわれは気付く。そして、構成という相補的能力によって、命題、演繹的推論、そして最後に、「科学」の諸体系への諸観念の統一がなされることに、われわれは気付くのである。つまり、言語は、語が抽象観念を象徴するのだから、一般的真理を表現し、「科学」（命題の体系）を伝えることが出来るだけである。⁽³³⁾

この知的過程の必然性は、しかし、言語の器官的進化を含意するものではない。言語は、本能ではなく、習慣であり、アリストテレスが述べたように、契約 compact によって有意味となった語の人為的体系である。言語は、伝達の用具として、精神によって発明された。そして、言語は、その抽象性と体系性の程度によって評価出来る。ハリスは、モンボドと違って、それらの判定基準を野蛮な言語にまで延長せず、技能の言語のみを考察している。ギリシア語のように、真の技能の言語は、哲学的である。そして、哲学的であるのは、それが、抽象の等級（より一般的なものがより一般的でないものの中に含まれるような）としての自然と技能の包括的見方を提供する程度によるし、また、言語が表しているその知的世界が現実世界の真の反映である程度によるのである。抽象と構成の過程が完全であるならば、完璧な知的形相の階層構造は、自然の現実の類と種を反映するだろう——そこにおいては、不完全な感覚的形相のみが、質料と結合しているだけである。また、言語体系が正確に、その原型が類と種である一般的観念の「結合関係と対立関係」“connections and oppositions”を表現するよう

(33) 『ヘルメス』310-5, 326頁以下, 341-7, 364-8, 436-8頁。『言語の起源と進歩について』第I巻, 42-6, 53-109, 175-83頁。

に、「派生語と合成語の正しい系統付け」“just deduction of derivatives and compounds”も存在しなければならない。それが達成されたときには、自然史の対象である自然的種の階層構造に対応するような、文法的類の統一的階層構造が存在することになるだろう。例えば、言語的体系は、動物の体系のように、異なった水準の間の連結環として働くような中間的種を持っていることだろう。⁽³⁴⁾

これまで概観してきたような言語の概念は、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』双方に浸透している。しかし、ハリスは、言語の起源と進歩を詳しく扱うことは全然していないけれども、『ヘルメス』は、その問題について、『言語の起源と進歩について』では大体において暗黙のものにすぎない幾つかの興味ある見解を確かに含んでいる。それは、J. C. スカリゲルとサンクティウスによる「アリストテレス的」哲学の言語への適用とストア哲学の広範囲の影響の両方を反映している暗示的見解である。

文法は、ハリスによると、自然ばかりでなく論理をも反映する。そして、その原型が論理と自然において結合しているような品詞のみが、文法においても結合する。例えば、実体と属性(偶有性)の自然における一致から、「主語と述語の論理的な一致、そして、実詞と限定詞の文法的な一致」が生ずる。こうして、「規則に合って秩序立った」“regular and orderly”文においては、主格は、三つのことを指す。「自然の実体 substance, 論理学者の主辞 subject, そして、文法家の実詞 substantive」である。⁽³⁵⁾

言い換えれば、言語は本能ではないけれども、その発達には、実際的に必要に支配され、そして、すべての理性的構成物と同様に、科学によって明らかにされる自然の法則に従うのである。例えば、前置詞は、元来は、知覚出来る対象物に言及し、場所の関係、つまりすべての自然的実体相互の基本的関係に由来した。それらは、宇宙の「目に見える全体」を形づくるのに必要であった。その上、品詞の発明は、精神の形而上的進歩を反映した。例えば、人々は、非常に早くから物理的事物の多様性を感じていたに違いない。そこで、「離接接続詞」“disjunctives”は、原因を表す接続詞より前

(34) 同上書。

(35) 『ヘルメス』279-80頁。

に現れたに違いない。というのは、原因を表す接続詞は、四つの型の原因の分析を必要としたからである。同様に、人間は、彼の魂の認知作用や意志作用を一定の順序で反映する時制と法 *moods* を獲得したに違いない。そして、従って、時制と法の「自然的な」数が存在するだろう。⁽³⁶⁾

このようにして、ハリスとモンボドは二人とも、言語を熟慮の上の構成物と見なしているが、それは、人間の観念の次第に程度の高くなる抽象と歩調を合わせて発達し、しかし他方で、潜在的諸能力の予め決まっている発達の筋道に依存しているのである。人間は、具体的特殊物、つまり、最も低く、知覚的に最初で、動物世界に最も近いものから出発し、決まった段階を追って、次第に一般的な概念へと上に向かって進む。人間はより一般的概念に到達するにつれて、徐々に全体の統一性を感じるようになり、遂には、すべての他の事物がそこに由来する最も「超越的理解」“transcendental comprehensions”，即ちアリストテレス的範疇に到達する。それだけではなく、複雑な技能の言語は、物理的世界だけでなく、知的及び精神的世界にも適用できる命名法の一つの形態である。『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』の超越主義にもかかわらず、この接近姿勢は、アーカート Urquhart、ダルガルノ、ウィルキンズのような17世紀の哲学的言語の発明者の姿勢と似ている。つまりハリスとモンボドにとっては、技能の言語は、1750年までには科学の範型になっていた自然史の術語的体系に似ているのである。そして、類と種の実在をめぐる当時の論戦において、彼らは、ビュフォンに反対してリンネを支持したのだった。⁽³⁷⁾

そのような関係は、ハリスの普遍文法を補おうとするなかで、モンボドによって、明らかにされている。例えば、彼は、相当の頁数をウィルキンズに当てて、ギリシア語やサンスクリット語のような高度に発達した技能の言語が、事実上は、ウィルキンズの見地からする哲学的言語であると論じている。⁽³⁸⁾ しかし、中でも、彼は、ハリスの普遍文法の範囲を、言語の

(36) 同上書、265-71, 245-6, 252-8頁。

(37) アールスレフ (1967年) 153頁; A. O. ラヴジョイ「ビュフォンと種の問題」, 『民衆の科学月刊誌』LXXIX号 (1911年) 464-73, 554-67頁; 『ヘルメス』44頁; 『言語の起源と進歩について』第I巻, 270-360頁。

(38) 『言語の起源と進歩について』第II巻, 440-82頁。

哲学的(或は推測的)歴史の文脈において、その「アリストテレス的」原則を検討することによって、拡張している。そのような歴史は、普遍文法の法則を確立するものと想定されていたのだった。

モンボドによる言語の哲学的歴史は、ハリスが係わらなかった諸言語の考察を包含している。それらは、いわゆる「野蛮な」言語で、ギリシア語やサンスクリット語のような技能の言語と比較して、相対的に抽象語と体系性が欠如していることが、伝統的に、話し手の精神の未発達の状態を反映するものと想定されていた。しかし、モンボドは、言語のそれら二つの大きい部類の間の発達の連続性を認めない。野蛮な言語は、哲学者がそれから技能的な言語を構成する「質料」だけであるというのである。そして、モンボドが、野蛮な言語が様々な程度の技能を示すことを発見したときも、彼は、それらの言語が或る種の無意識的で、器官的な発達の産物であるとは、結論付けなかった。そうするのは、言語の構造を精神の構造から分離することになるだろうということで、モンボドは、誘惑を感じたこともあったかも知れないが、注意してそのような危険な見解を退けている。野蛮な言語でも、たとえ場当たりのやり方にせよ、意識的に発達させられたものである。したがって、せいぜいのところ、技能の萌芽を含むに過ぎない。もしその体系性がその段階を越えているならば、それは、その言語がどこかのより文明化した人々から借用されたことを証明するものである。聖なる精神が、世界を、目的因のために規則的に、また技能的に創造したように、最も進歩した人間精神は、理性の表現のために技能の言語を創造した。言語も、精神も、宇宙も、運動する物質の偶然的産物ではないのである。⁽³⁹⁾

こうして、モンボドは、ハリスの基盤を足場として、後期ルネッサンスを17世紀と結び付ける三つの相補的な学問を結合する。哲学的文法、哲学的歴史、哲学的言語である。ハリスと共通に、彼は、部分的には、J. C. スカリゲルに啓示を受けている。スカリゲルは、スコラ哲学者より厳密に、アリストテレスの原則を普遍文法に適用し、サンクティウスと共に、普遍文法と哲学的言語の17世紀における並行的発展の基礎を置いた人だった。

(39) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 482-8, 514-73頁。

言語の哲学的歴史は、普遍文法と哲学的言語の系である。何故なら、それが普遍文法の原則を確立するからであるだけでなく、それが、スカリゲルの言語の科学の概念の後間もなく、そして、同じ幾つかの理由から一名目論的経験論に反対するような、精神の人文主義的「科学」を創造するために一展開されているからでもあった。⁽⁴⁰⁾

実際、この目標をもって、モンボドは、ハリスと同様に、学識の統一性の人文主義的概念を復興しようとする。それは、哲学、論理学、修辞学のキケロ的統一に具現化していた知恵の観念である。この統一は、経験科学の興隆によって次第に崩れてきていたが、キケロの人文主義的理想、つまり人間の事柄の指針のための知識の効果的利用の基礎である。それは、特に、この二人の著作家によって支持されており、『言語の起源と進歩について』全体の構造によって確認される。真理を生み出す一般的観念の総合と見られるので、言葉は、「事物」に、つまり論理学と哲学に関係する。聞き手との関係でみられたときには、言葉は、修辞学に関係する。「ロゴス」— 理性の表現としての言語 — を、知的世界の中心的位置にまで復位させることによって、ハリスとモンボドは、言語、精神、そして、中世の文法的伝統の一部でもあった認識論の統一を再確認する。この統一は、抽象観念— 普遍的理性（アリストテレス的論理学）の基盤であり、従って普遍文法の基盤、によって保証される。というのは、神的、道徳的、物理的世界を結び付ける類と種の目に見えない鎖を構成するのは、抽象観念の階層構造であったからである。その上、神的な遍在する理性の第一位性を再確認することによって、彼らは、人間を、彼が精神的及び物理的世界の両方で参画している存在の等級における中心的位置に、復位させるのである。事実、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』は、主として、ハリスの伯父、シャフツベリとケンブリッジ・プラトン主義者に由来する人文主義的な文

(40) ユリウス・カエサル・スカリゲル Julius Caesar Scaliger (1484–1558) については、G. A. パドレイ『西欧 1500–1700 年の文法理論』(Cambridge, 1976 年) 58–76, 97–102 頁を見よ。

次のものも見よ。『ヘルメス』242–7, 258, 264 頁; 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 236 頁, そこで、モンボドは、スカリゲルの『ラテン語の起源について』(1540 年) に言及している。

化的綱領の見地において見ても良いだろう。エリート主義的、超越的、折衷的で、それは、スコットランドの哲学、宗教、大学教育を変えようと北部に広がった紳士文化のギリシア風の理想を示していた。それは、雄弁運動—『言語の起源と進歩について』の創まりとスコットランド啓蒙運動全般にとって相当重要であった運動と、密接に結び付いていた至る所に見られた趣味崇拜の一つの側面であった。したがって、アダム・スミスと他のスコットランドの教授たちが、道德哲学の似たような見方を取っていたとしても、全然偶然ではないのである。道德哲学は、スコットランドの大学教育にとって中心的位置を占め、法哲学と密接に結び付いている主題であった。彼らの接近姿勢は、次の世紀まで続いていったが、自然法の伝統に多くを負っていた。それは、『言語の起源と進歩について』に似たやり方で、論理学、修辞学、普遍文法、言語の歴史を混ぜ合わせていた。更に、彼らの雄弁崇拜と一般的教育に関する計画の中に、他の、余り明示的ではない、人文主義的目的の繰り返しを見ることも、可能である。それは、国家における秩序と身分の階層構造の正当化である。これは、確かに、モンボドには当てはまる。⁽⁴¹⁾

上で見たように、『言語の起源と進歩について』は、実際、1766年3月の手紙の中のモンボド自身の言葉を使えば、『ヘルメス』の「第二部」と見なされても良い。そして、明らかに、その時までは、モンボドは、彼の言語の哲学的歴史をハリスの哲学的文法と関連付け、「野蛮な」言語についての彼自身の収集した資料と比較して、その「アリストテレス的」原則の正当性を立証することを、考えてはいなかったのである。

実際、モンボド文書は、モンボドが元もとは『言語の起源と進歩について』に普遍文法を包含させる積もりは全く無かったことを示している。もしそういうことであるとすれば、モンボドがハリスに負っているものは、最初見られるよりもずっと大きくなる。というのは、第Ⅱ巻の大部分を主として『ヘルメス』に基づいた哲学的文法に当てることによって、彼は、自分の哲学的歴史の範囲を相当に拡大したからであるし、また、モンボドを新プラトン主義と歩み寄るよう導いたのは、ハリスの文法に関する考え

(41) 本論文第Ⅵ章を見よ。

であったと思われるからである。

「アリストテレス的」普遍文法を復興しようというハリスとモンボドの企てを論じる前に、これまで述べてきたことを要約し、幾つかの点を明確にすることも適切であろう。

モンボドの普遍文法の研究は、ハリスのものと同様に、極端な経験論哲学とその論理的帰結—感覚主義、唯物論、名目論、認識論的懐疑主義に反駁することを目指している。経験的立証の役割を否定することなく、彼らは、彼らの信ずるところでは、すべての科学が依存しているのに、当時の科学が大体において無視していた合理論的諸原則を再確認する。それらの原則は、言語の人文主義的研究に具現化していたのだった。

彼らの主張は、第一には抽象観念の地位という基本的哲学的問題に係っている。彼らが示したいと思うのは、抽象観念が、普遍物であって、ホッブズ、ロックや当時の哲学者が申し立てたように、実在を分類するのに都合の良い作り事にすぎないとか、人間の知的限界の不可避的結果である、というのではないことである。経験論者の「感覚的観念」*sensible ideas*とは違って、抽象物は、明確で安定しており、それは、自然哲学者が浸っている混乱し、変わり易く、限りない特殊物の世界を範疇化する唯一の道である。特に、彼らは、一般的と特殊的、言い換えれば、知的と感覚的働きの両方を指す、ロックによる「観念」という用語の誤用を批判する。⁽⁴²⁾

言語は、抽象（とその補足たる、構成）の経験的方法に対するこの優越性の有力な証拠を提供する。つまり、言語は、物理的・自然的 *physical*ではなく、知的な知覚作用が自然の包括的理解を可能にすることを証明する。自然哲学の物理的分割と違って、抽象は、有限である。それは、知的及び物理的世界の双方を、包括的に理解する。それは、「事物の原因そして原則と要素」“the causes, and principles and elements of things”を分析する。即ち、実験的哲学が無視している、質料と形相の基本的区別を立てるのである。究極的には、それは、すべての善、真理、美の源である、神的精神を発見さえする。要するに、精神は、われわれが聖なる理性に徐々に上昇することを可能にさせるのであるから、物質より優れているの

(42) 『言語の起源と進歩について』第I巻, 47-93頁。『ヘルメス』353-80頁。

である。⁽⁴³⁾

しかし、自然の不完全な知覚可能な形態のほかに、それに対応する体系を作っている完全なプラトンの観念の先在する世界もある。そこで、知覚は、精神を目覚めさせ、一般的観念を思い出させるだけなのである。魂は、既に、神の精神から降りてくる「明瞭で精確な観念」を含んでいる。言い換えれば、知識は、(経験論者が主張するように) 外的原因に第一に、或は専ら依存するのではなく、むしろ、精神の内的活力に依存するのである。言葉それ自体は、「魂の或る力の公表」“publishing of some energy of the soul”なのである。⁽⁴⁴⁾

言語の哲学的研究はまた、われわれの精神を、そして従って、すべての哲学と科学を支配している普遍的理性が、抽象の同じ生得的能力に基づいていることを証明する。それは、経験論が流行遅れだとしている、アリストテレスの演繹的論理そのものである。こうして、言葉の研究は、われわれを、真の「科学」、学識の統一性、そして、精神の第一位性へ連れ戻す。それは、普遍文法、論理学、そして、修辞学の役割が、相互に依存し合っていることを示すのである。

モンボドは、自分自身をルネッサンスの継承者と見なす点で、典型的な啓蒙思想哲学者である。しかし、彼が非典型的であるのは、人間理性の表現としての言語に基づく、すべてを包含する、人文主義的な科学概念の連続性を確立しようと企てる点である。というのは、そうすることは、丁度 J. C. スカリゲルが、それらをルネッサンスに対して復活させたように、支配的であったロック的「人間の科学」のその古典的根源への復帰、そして、本来の「アリストテレス的」諸原則に立つ啓蒙運動への復古を含んでいたからである。究極的には、それはまた、経験論と合理論の和解を含んでいた。そして、そのことすべてにとって媒介となるものが、普遍文法の「アリストテレス的」伝統であった。

(43) 同上書。

(44) 『ヘルメス』327-59頁。

2. ハリス, モンボド, そして, 古代の文法家たち

『ヘルメス』において, ジェイムズ・ハリスは, 古代の文法論の伝統の中世的歪曲と彼が見なすものを避け, その本来の原則に戻ろうとする。つまり, 彼は, 古代人の文法を再興する人文主義者の例に従うのである。そして, モンボドの場合と同様に, 彼の人文主義者の目的との一致の意識は, 最大の重要性をもっている。他の18世紀の哲学者と同様, 彼らは, 啓蒙運動をルネッサンスの連続と見なしている。しかし, 「古代人」と「現代人」の争いにおいては, 彼らは, 「古代人」を支持する。彼らにとっては, ルネッサンスは, 古代との接点である。そして, 彼らの目的は, 啓蒙運動の源に帰ることであり, それは, 彼らの信念によれば, その哲学的運動がそこから逸脱している古代の諸原則を回復させるためである。彼らの歴史的接近姿勢(ロックの「歴史的で, 平明な方法」)さえも, 起源を第一原理と同一視するものであるが, 啓蒙運動に典型的であるけれども, 実は, ルネッサンスに由来している。そして, 彼らは, 明らかに, その由来を意識している。

一つの点で, しかし, ハリスとモンボドは, 見当違いをしていた。スコラ哲学は, 長い間人文主義と共存しており, 古典文法を作り替えていたのだった。そこで, 古代人を復位させようとする際に, 人文主義的文法の伝統は, 必然的に, 自らが軽蔑するふりをしていた時期である中世から借用した。そして, スコラ哲学の遺産は, イングランドでは特に際立っていたように思われる。人文主義が中世的世界観を捨て去るのが遅かったからである。⁽⁴⁵⁾ いずれにせよ, この無意識的な負債は, ハリスとモンボドのものを含めて, 16世紀から18世紀までの普遍文法において, 重要な要素であり続けたのである。

ハリスの古代の文法家の一覧表のなかで, 主要な名前は, アリストテレス, ストア哲学者, そして, アレクサンドレイアのアポロニオス・デュスコロス Apollonius Dyscolus of Alexandria (紀元2世紀)である。ハリスは従って, 彼がストア哲学者とアレクサンドリア学派によって発達させられたアリストテレス的文法の伝統と考えたものに訴えていたのである。

(45) パドレイ, 上記書, 6頁。

この伝統は、今日ではしばしば、アポロニオスの伝統と呼ばれており、事実、アポロニオスがそのつながりの一つの重要な連結環であった。西方の統語論的記述の創始者として知られている彼は、先行者たちの仕事を集大成したが、例えば、ストア学派による形態と意味の間の区別をそのまま繰り返したりしている。⁽⁴⁶⁾

ハリスにとっては、人文主義者にとってと同様、アポロニオス・デウスコロスに到る道は、しばしば、後期ローマの文法家プリスキアヌス Priscian (紀元5世紀)を通してのもので、この人の『文法の原理』*Institutiones grammaticae* は、アポロニオスの『統語論』*Syntax* の失われた部分を再構成するために利用できるものであった。(ドナトゥス Donatus (350年頃)と同じように、プリスキアヌスは、古代の末期に古代ギリシア文法を集大成し、古典時代の文法研究を中世の文法研究と結び付けたのだった。したがって、15世紀後期から16世紀初期のルネッサンス文法の内容の多くは、殆どこれらの文法家たちの焼き直し以上のものではなかった。)⁽⁴⁷⁾

意味深長なことに、ハリスのアリストテレス的文法の系譜には登場しないが、モンボドはその名を挙げているのが、西欧の文法に決定的影響を及ぼしたもう一人のアレクサンドリア学派の人、ディオニュシオス・トラクス Dionysius Thrax (紀元前1世紀?)である。ハリスが除いた理由はすぐ分かる。

ハリスにとっては、モンボドにとってと同様、言語は、何よりもまず、理性の表現である。そして、普遍文法は、人間の知的能力にとっての鍵である。ここにおいても、彼はその時代の思想家である。つまり言語の論理的基礎と精神の「科学」に関心をもつ哲学的文法家なのである。ハリスは、しかし、知的過程を、流行のポール・ロワイヤル論理学ではなく、流行遅れのアリストテレスの論理学と同定する。アリストテレスに、ポール・ロワイヤルは、当時にもはっきりと理解した人がいたように、一般に認められている以上に多くのものを負うていた。そこでハリスとモンボドは、彼らの同時代人だけではなく、大多数の人文主義者とも立場を異にすること

(46) 一般的には、R. H. ロウビンズ Robins『ヨーロッパ古代中世文法論』*Ancient and Medieval Grammatical Theory in Europe* (London, 1951年)を見よ。

(47) パドレイ、上記書、15-19, 22-9, 32-7, 44-6頁。

になる。ルネッサンスは、アリストテレス的文法の伝統は受け入れたが、大体において、アリストテレス的論理学は、そのスコラ哲学的つながりを理由に退けた。ハリスとモンボドは、それに対して、その二つは不可分であると見なしている。したがって、彼らは、自分たちのアリストテレス的精神観の擁護の基礎を普遍文法に置くのである。そして、その目的のために、ハリスは、演繹的論理に関するポルフェリオスを、『靈魂論』*de Anima* に関するアレクサンデル・アフロディシエンシス Alexander Aphrodisiensis を、引き合いに出すのである。⁽⁴⁸⁾

予想できることだが、ハリスは、彼の「哲学的」で論理的接近姿勢と一致しない古代とルネッサンス文法の諸側面、即ち、慣用と形式的判定基準に訴えること、を殆ど無視している。その代わりに、彼は、意味を重視する。意味論的接近姿勢は、ハリスとモンボドが認めているように、アリストテレスに潜在していた。それは、ストア学派によって引き継がれ、アポロニオス・デュスコロスによって引き継がれた。アポロニオスは、形態と意味の判定基準が衝突するときには何時でも、意味に訴えた。そのようなやり方は、しかし、ディオニュシオス・トラクスの特色ではない。明らかに、そういう理由で、ハリスは、アリストテレスから生じている普遍文法家の一覧表から彼を除くのである。

アポロニオスとディオニュシオス・トラクスとの違いは、アレクサンドリア学派によって確立した八品詞の定義において最も著しい。ディオニュシオス・トラクスが大体において形式的見地を採用するのに対して、アポロニオスは、ストア学派の特徴である普遍的と考えられる、論理的、哲学的基準に訴える。それらの基準によると、名詞は、例えば、実体と性質を意味し、他方、屈折した動詞形は、心的状態を表すとされる。そのような定義がアリストテレスを基礎としていることは、明白である。⁽⁴⁹⁾

(48) 『ヘルメス』39, 294, 310, 433 頁。

(49) トラクスについては、パドレイ, 32-3, 118, 254, 256 頁を見よ。アラン・ケンプ Alan Kemp『進行中の仕事』*Work in Progress* (エディンバラ大学言語学部) 13 号, 1983 年, 100-11 頁も見よ。アポロニオス・デュスコロスについては、パドレイ, 16, 21, 23, 44, 50, 66, 70, 106, 126 頁, また、アラン・ケンプ『進行中の仕事』11 号, 1978 年, 107-9 頁も見よ。

そう言ったからといって、アリストテレス主義を保持する関心において、ハリスが主流である人文主義的伝統から外れているというのではない。ルネッサンスが古代から受け継いだ形式的及び意味的基準の混合にもかかわらず、初期の人文主義的文法の支配的流れは、既に「意味論的」semasiologicalであると説明されてきている。ハリスは、そこで、『ヘルメス』の知的祖先を尋ねて、西欧の文法的伝統の古代の創始者たちに到っていると言えるだろう。彼はまた、ディオニュシオス・トラクスは別にして、その伝統が基本的にはアリストテレスの流れを汲んでいること、つまり、意味論的基準に基づいた普遍文法の伝統であることを指摘したと言えよう。⁽⁵⁰⁾（ハリスのディオニュシオス・トラクスの除外を考えると、興味あることに、現代の注釈者の中には、彼の『文法の技能』*Téchne grammatiké*の大部分が、紀元前1世紀のものではなく、紀元3世紀と5世紀の間のある時期のものとする人がいる。そうだとすると、それは、アポロニオス・デュスコロスの著作よりも年代的に新しいことになるだろう。その説は、アポロニオスがどうも一回だけしか彼の先行者に触れておらず、その言及がわれわれの知っているテキストと一致しないという事実によって、補強される。⁽⁵¹⁾ 勿論、ハリス自身が、ディオニュシオス・トラクスの著作がもっと後の時代のものであるのではないかと疑いを抱いたかどうかを言うことは、不可能である。それがアリストテレス的伝統と一致していないことで、充分であった。）

そこで、ハリスは、英文法の流れを遡ってアリストテレスに到っているということも、同じように言えるだろう、ということになる。そして、ハリス自身がそれを当然のこととしているのは明らかであるが、次のことは思い起こす価値がある。即ち『ヘルメス』の背後には、イングランドにおけるギリシア研究の創始者の一人、リナカー Linacre に遡る、人文主義的文法のはえ抜きの伝統が存在したことである。ハリスは、リナカーとその普及者、リリ Lily の仕事を良く知っていたに違いない。というのは、彼らだけが、英国のルネッサンス文法を叙述し、アポロニオス的（或はプリス

⁽⁵⁰⁾ パドレイ、上記書、41-3, 45-50, 52-3, 86-8, 90-3頁。

⁽⁵¹⁾ ケンプ、上記書、100頁を見よ。

キアヌス的) 伝統を18世紀とそれ以後にまで送り込んだからである。その上、リナカーは、ハリスと同様に、古代の文法を復元したが、その際、ストア学派、アポロニオス、プリスキアヌス、ガザを主要な源泉として名前を挙げているのである。実際、他のところでは消えてしまったずっと後まで、英文法では、ギリシア的特徴が存続したのは、リナカーの影響のせいである、との主張が以前から提出されている。⁽⁵²⁾

しかし、スコラ哲学が古典文法を作り直したので、リナカーの『構造について』*de Structura* (1524) は、強い中世的性格をもっているとも言っても良いだろう。それは特に、言語に合理的下部構造 *rational substructure* を認めるところに現れている。その点では、リナカーは、後期ルネッサンスのある著作を先取りしている。それは、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』に相当な影響を及ぼし、その普遍文法の伝統に対する大きい重要性を最初に認めた一人がハリスであったという著作で、サンクティウス Sanctius による1587年の『ミネルヴァ』*Minerva* である。⁽⁵³⁾

付言しておいて良いだろうが、ハリスによるアリストテレスのプラトン、キケロ、クインティリアヌスとの混合は、同じように英国ルネッサンスの伝統の中にある。英国の人文主義者は、丁度モンボドがしたように、国家における秩序と階級の階層構造を正当化するために、それらの著作家を利用したのである。

言い換えれば、『ヘルメス』の中には、カドワースのようなケンブリッジ・プラトン主義者の影響だけでなく、ケンブリッジの運動を包含する英

⁽⁵²⁾ パドレイ, 36-7頁。

⁽⁵³⁾ 同上書, 53, 56, 58頁。フランシスコ・サンチェス・デ・ラス・ブロサス Francisco Sánchez de las Brozas (後に、フランシスクス・サンクティウス・ブロケンシス Franciscus Sanctius Brocensis) の『ミネルヴァ: またはラテン語の起源について』*Minerva: seu de causis linguae Latinae* (Salamanca, 1562年) に対する注釈については、パドレイ, 92-3, 97-110, 113, 195頁を見よ。彼の『言語学的探究』(London, 1781年) で、ハリスは、『ミネルヴァ』を彼に初めて文法の合理論的観念を与えてくれた「計り知れない価値を持つ本」と述べている。彼は、ペリゾニウスの1733年アムステルダム版を用いた(『言語学的探究』21頁)。*『ヘルメス』* 5, 36, 163, 171, 175, 202頁も見よ。

国人文主義の伝統の存続も見られる。そして、その伝統に照らして、ハリスは、普遍文法の歴史を、特に後期ルネッサンスの決定的転回点を、考察しているのである。

3. スカリゲルとサンクティウスの影響

経験的科学に対抗してアリストテレス的合理論を擁護することに関心を持つ哲学的文法家として、ハリスが後期ルネッサンスに焦点を合わせるのには、十分な理由がある。16世紀には、人文主義的文化と「実験的哲学」の衝突(「書物の戦争」Battle of the Booksとか「古代人」と「現代人」の争いとか言われる)とその衝突の反映である、語を事物と対立させる見方が始まったのだった。

一方では、『思弁的文法』*Grammatica speculativa*の中世の伝統が初期ルネッサンスには衰退したが、アリストテレスとスコラ哲学的方法は、17世紀を通じて、更に後までも、大学において影響力を持ち続けていた。他方では、自然哲学者は、知識は経験のみから生ずるという「ベーコン的」原理に基づいた、発見の新しい手段の開発に次第に関心を持つようになっていた。ハリスとモンボドが彼らの主要な攻撃をこの原理に向けるのは、十分に根拠がある。もし知覚可能な事物のみが現実的であるならば、抽象観念(普遍物)、そして、それらを表す語は、名前にすぎないことになる。そして、もし、ベーコンが主張したように、われわれの精神がまた感覚から受け取った知識を歪めるのだとすれば、われわれの事物の知識さえ、疑わしいものとなる。つまり、実験的哲学は、アリストテレス的世界観と両立し得ないだけではなかった。それは、必然的に、名目論と懷疑論に通じて行ったからである。

16世紀の文法と修辞学は既に、それらの傾向を反映していた。文法は、次第に言語外的判定基準に訴えるようになり、文法的機能よりは語彙と用語法に集中した。様態論者 Modistae によれば感覚世界に構造を与える介在する概念を無視するので、そのような文法は、名前を直接的に事物と同一視した。つまり、支配的な力をふるう感覚論に歩調を合わせて、文法は、名目論的傾向を発達させたのである。同じ頃、修辞学は、単に装飾的なものとなり、科学的限界への関心のなかで、ラムス Ramus によって他の技

能から切り離されていた。したがって、饒舌は、軽蔑された。語ではなく、事物が重視された。⁽⁵⁴⁾

17世紀までには、これらの態度は、語に対する広範囲におよぶ不信の念を導き出してしまっていたが、それは、語がもはや事物の本質を意味すると感じられなくなったからである。この見解は、特にベーコン、ロック、ポール・ロワイヤルと結び付いていたが、17世紀の哲学的言語に対する執心と、語と事物の間の一対一の対応を望ましいとする態度に反映していた。⁽⁵⁵⁾そして、それらの問題は、モンボドが王立協会と合理論的伝統を調和させようとして、ある程度詳しく論じていることである。

要するに、16世紀に始まった感覚データへの集中は、現実には構造を与える精神という中世的見方に正反対のものであり、精確な文法的定義から離れる傾向に通じていた。ルネッサンス文法全般は、従って、言語記号のスコラ哲学的概念を、その形態と意味という一対の面とその文法的機能の同時表示 *consignification* の考えと共に、徐々に失っていくところに特徴があった。それは、17世紀に、ポール・ロワイヤルの文法家によって繰り返されることになる歪みであった。⁽⁵⁶⁾しかし、1540年には、普遍文法の歴史にとって最も重要であり、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』に深刻な影響を及ぼした中世的な意味表示 *signification* の概念への復帰が始まった。

それは、普遍文法をもう一度事物により接近させたいと思う、16世紀後半と17世紀初期の一群の学者によって成し遂げられた。言語研究が実験的哲学に地位を譲りつつあるのは、人文主義が学問の前進によって提起された発見的方法論の問題を解決しなかったからであることを理解していたので、彼らは、言語自体を発見の道具にしようとしたのである。⁽⁵⁷⁾

彼らの方法は、実在の形而上的構造のアリストテレス的な概念的把握をスコラ哲学よりもっと厳密に言語に適用し、そうすることで、言語分析の

⁽⁵⁴⁾ パドレイ、132-3頁。

⁽⁵⁵⁾ 同上書、56, 133頁。

⁽⁵⁶⁾ 同上書、64頁。

⁽⁵⁷⁾ 同上書、57頁。

ための哲学的基礎を確立することであった。つまり、彼らは、文法、哲学、論理学の中世的総合の多くの部分を復活させることによって、経験論とそれに結び付いている名目論に反対したのである。

それとは逆の傾向は、アリストテレスの十個の範疇を全く不十分な認識論的枠組みとして捨てることであった。最も注目すべきものとして、ピエール・ド・ラ・ラメー Pierre de la Ramée (ラムス) の『文法』*Grammatica* (1559) は、言語の研究のための経験論的基礎を確立しようとした。アリストテレス的論理学を修正し、形式文法を導入しようとするラムス主義的試みは、しばらくの間は、特に長老派教会の地域でかなりの成功を収めた。例えば、モンボドの監督教会派の北東部の顕著な例外はあったが、スコットランド低地地方がそうであった。⁽⁵⁸⁾

反ラムス主義的学者の集団のうちで著名な人物は、J. C. スカリゲル (1484-1558) とフランシスクス・サンクティウス Franciscus Sanctius (フランシスコ・デ・ラス・ブロサス・サンチェス Francisco de las Brozas Sánchez, 1554-1628) であった。ハリスは、彼の後に続いたモンボドと同様、しばしば、スカリゲルの『ラテン語の起源について』*De Causis linguae Latinae* (Lyons 1540) と、元もとは1562年に出版され、25年後に改訂された (Salamanca 1587) サンクティウスの『ミネルウァ：またはラテン語の起源について』のペリゾニウス Perizonius による版に言及する。⁽⁵⁹⁾ 彼らは、その『文法的技能について』*De arte grammatica* (Amsterdam 1635) も17世紀前半に大きい影響を持った G. J. フォシウス (1577-1649) を余り利用していない。それは、フォシウスが形式的判定基準にかなりの重点を置いているからであろう。

これらの著作家がその後の普遍文法の歴史に、そして、従って、その歴史を跡付けることに関心を抱くハリスとモンボドに及ぼした影響は、申し分なく確認される。スカリゲルは、特に、文法を理性に一致させ、方法に従わせた。そして、ラムス主義的要素を持っているが、サンクティウスは、スカリゲルの先導に従った。彼らは、言語の「共通原理」“communis

⁽⁵⁸⁾ 同上書, 77-96 頁。

⁽⁵⁹⁾ 『ヘルメス』82, 128, 138, 169, 233, 238, 242-7, 258, 264 頁 (スカリゲル): 5, 36, 163, 171, 175, 202, 238 頁 (サンクティウス)。

ratio”に基づいた科学としての文法を再確立すること、また、基底に横たわる言葉の「諸原因」“causae”（心的事象）を明らかにすること、そして、特にスカリゲルの場合には、文法が持つ精神と実在のアリストテレス的範疇との関係を再確認することを目指したのだった。様態論者の『思弁的文法』におけると同様、言語は、宇宙を鏡のように写し、諸現象を「永久的事象」*res permanentes* と「流動的事象」*res fluentes* に分割する。語は、意味だけでなく、音的構造から成っている。そして、統語論は、基底にある心的概念の表層における実現である、というのであった。この基底にある論理的構造という考えは、サンクティウスにおいては特に重要である。というのは、彼は、スカリゲルよりも統語論を重視していたからである。⁽⁶⁰⁾

主としてスカリゲルの影響のせいで、16世紀末までには、アリストテレス的判定基準が保守的人文主義者によっても用いられるようになっていた。文法はもはや、慣用と権威 *usage and authority* によって決定されなかったし、語は、直接的に事物と同一視されることはなかった。⁽⁶¹⁾ そして、17世紀の間には、ストア哲学者を思い起こさせるスカリゲルの言語と自然の調和に対する関心は、『独創的文法』*Grammatica audax* (Frankfurt 1654) の司教ホアン・カラムエル・イ・ロブコウィッツ Juan Caramuel y Lobkowitz (1606–1682) と『合理的哲学五部作』*Philosophiae rationalis partes quinque* (Paris 1638) のトマソ・カンパネラ Tommaso Campanella (1568–1639) によって受け継がれた。彼らは、ラムスとカルヴィニズムに対する反動の一部であったが、スコラ哲学的論理学と中世的世界観への復帰は、大多数の17世紀の文法家の「曖昧な辞書編集的接近姿勢」と対照的であった。⁽⁶²⁾ 彼らは、哲学的言語追究の伝統にも重要な影響を及ぼし、モンボドは、彼がかなりの頁をあてた著作、ウィルキンズ主教の『真の文字と哲学的言語への試論』*Essay towards a Real Character and a Philosophical Language* (London 1668) を経由して、彼らの著作のことは知っていた。⁽⁶³⁾

⁽⁶⁰⁾ パドレイ, 60–76, 97–114, 261頁。

⁽⁶¹⁾ 同上書, 31頁。

⁽⁶²⁾ 同上書, 162, 178頁。

⁽⁶³⁾ 『言語の起源と進歩について』第Ⅱ巻, 440–82頁。

更に一層重要なのは、スカリゲルとサンクティウス (特に後者) が、ポール・ロワイヤル文法とそれと連携したラテン語文法の第3版、C. ランスロ Lancelot の『ラテン語を容易にかつ短時間に理解するための新教本』*Nouvelle Méthode pour apprendre facilement et en peu de temps la langue latine* (Paris 1654) とに与えた影響であった。アルノーとランスロの有名な『一般的・理性的文法』*Grammaire générale et raisonnée* (Paris 1660) の重要性は、強調し過ぎることは殆どできない。それは、17世紀と18世紀の大多数の普遍文法の主要な源泉であった。それはまた、ロックと百科全書家たちに影響した。彼らが方法論、認識論、言語の間の関係、そして、特に、精神の科学としての普遍文法の科学という観念を強調するのは、主としてポール・ロワイヤルにその源がある。⁽⁶⁴⁾ ここで、スコラ哲学の影響を認めるのは、容易である。スカリゲルとサンクティウスに従って、ポール・ロワイヤルの文法家は、言語を世界の鏡と見なし、言語的諸過程を精神の表現と見、文を論理的命題の具現化と見なした。⁽⁶⁵⁾

要するに、啓蒙運動が非常に多くのものを中世から引き継いだのは、主としてポール・ロワイヤルの影響によるものだった。しかし、ハリスとモンボドが理解したように、ポール・ロワイヤルは、アリストテレス的文法の伝統との決定的断絶を表しており、その著者たちは、ロックと百科全書家たちのように、彼らが恩恵を受けているアリストテレス的基盤を意識の上では退けたのだった。ポール・ロワイヤル文法とそれが密接に結び付いている論理学、アルノーとニコルの『論理学または思考の技法』*La Logique ou l'art de penser* (Paris 1662) は、デカルト的文脈にあった。ポール・ロワイヤル論理学によると、アリストテレス的演繹的推論は、発見の道具ではなく、また、知識は、アリストテレスが主張したように感覚を通じて獲得されるのでもない、というのであった。知識は、観念を通じてのみ獲得されるのだった。そして、この見解は、語は概念を意味するだけであるとし、語の形態的構成要素と語が同時に表示する *consignifying* 文法的機能が無視されるというポール・ロワイヤル文法に、反映している。言

(64) パドレイ, 74-6, 211-3, 217-25, 240-52 頁。

(65) 同上書, 261-2 頁。

い換えれば、アルノーとランスロは、精神を実在から、語を事物から、切り離すのである。それは、従って、傾向においては、名目論的で懷疑論的であった。⁽⁶⁶⁾ モンボドが、ヒュームの懷疑論の源は、デカルトがロックに遺贈した観念の理論であることを見て取ったのは、確実である。更に、ポール・ロワイヤル文法は、ロックの『知性論』と共に、フランスの哲学者による言語の起源と本性に関する経験論的＝唯物論的著作の基礎となっていたが、それらの著作が、『言語の起源と進歩について』の創まりと恐らく『ヘルメス』の創まりにとっても決定的役割を演じたのだった。⁽⁶⁷⁾

今や、ハリスとモンボドが実質的にポール・ロワイヤル文法を無視し、その代わりに、その主要な源泉であるスカリゲルとサンクティウスに戻る理由は、明らかである。彼らの合理論的文法の体系は、ルネッサンスの名目論に対抗するために書かれたのだが、『ヘルメス』と『言語の起源と進歩について』にとって中心的な当時の重要な論戦、即ち、抽象観念の本性と種の実在に関する論戦に深く関連していた。そして、まさにその問題に関して、スカリゲルとサンクティウスは、ポール・ロワイヤル文法と最も基本的に意見を異にするのである。彼らは、質料と形相のアリストテレス的区別を強調し、精神における種（事物の形相）の存在を再確認する。彼らは、「知的動作主」による概念、語、自然現象の間の一致を断言する。「知的動作主」というのは、感覚印象を理解可能にするものとされ、ポール・ロワイヤルによって無視され、百科全書家によって嘲られたが、モンボドによっては重視されたトマス主義が認める能力の一つだった。⁽⁶⁸⁾ その結果、スカリゲルとサンクティウスにおいては、ポール・ロワイヤル文法におけるのとは違って、語は、概念を意味するだけではないことになる。感覚を通じて知識を獲得することについてのアリストテレス的見解を復位させること、そして、中世的認識論全体を受け入れることによって、彼らは、語と事物を再び結び合わせるのである。言い換えれば、スカリゲルとサンクティウスは、真理を、事物とその理解とのトマス主義的な自然的一致と見る。それは、ホッブズに反対するケンブリッジ・プラトン主義者やモン

⁽⁶⁶⁾ 同上書, 244, 261-3 頁。

⁽⁶⁷⁾ 本論文第V, VIII, IX, XIV章を見よ。

⁽⁶⁸⁾ パドレイ, 233-5, 238, 244 頁。

ボドと同時代の反ヒューム的なスコットランド常識哲学者によって抱かれていた見解に似通っている。重要なことは、ケンブリッジ・プラトン主義者、特にカドワースが、ハリスとモンボドだけでなく、向上を目指すスコットランド温和派、特にいわゆる「ギリシア復興」“Greek revival”と関係していたシャフツベリの信奉者たちにも影響したことである。⁽⁶⁹⁾

ハリスとモンボドの歴史的接近姿勢が持つ完全な意義は、今や、明白である。彼らのルネッサンスにおける起源に戻ることによって、「古代人」と「現代人」の間の（言い換えれば、人文主義的言語学と経験的科学の間の）争いの第一原則は、最終的に、解決され得るだろう。そして、それらの諸原則は、正に「啓蒙」という概念そのものに係わっていたのである。スカリゲルとサンクティウスを支持することによって、ハリスとモンボドは、普遍文法という科学と、哲学者たちによって捨て去られた精神と実在のアリストテレス的範疇との間の関係を再確認してもいる。そして、ポール・ロワイヤル文法の源を辿って、スカリゲル、サンクティウス、そして、西方の文法的伝統にその起源を見出すことによって、彼らは、哲学的文法をその本来の諸原則に戻しているのである。というのは、その本来的な形態においてのみ、普遍文法は、アリストテレス的合理主義を回復し、経験科学の名目論的、唯物論的傾向に対抗することになると思われるからである。

要するに、ハリスとモンボドにとっては、スカリゲルにとってと同様、「文法は、事物の記号に関わる」“Grammatica est de signis rerum”のである、但し、彼らは、中世の『思弁的文法』と自分たちとの関係を意識してはいなかった。この二人の啓蒙思想家が、ロックの影響のもとに、文法家は形而上学者でなければならない、と主張したとき、彼らは、それとは知らずに、多くの人文主義者によって嘲られた様態論者の決まり文句を繰り返していたのである。ハリスとモンボドは、言語と精神が実は形而上学に基礎を置いていること、しかし、その形而上学は、アリストテレスの原本の「諸科学の科学」であって、ロックの歪曲版ではないことを、明らかにしようと願っているのである。

⁽⁶⁹⁾ 本論文第七章第4節を見よ。